
異世界に召喚されて

さくま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に召喚されて

【Nコード】

N8948R

【作者名】

さくま

【あらすじ】

普通の高校生だった俺はある日いきなり異世界に召喚された。

召喚された世界は、魔法と剣のファンタジー。

これは俺が元の世界に戻るための物語。

1・異世界にて――side A（前書き）

ファンタジー書いてみた。とりあえず5部まで書けている。1部と2部を投稿してみる。

1・異世界にて―side A

…ここはどこだ？

俺が目を覚まして最初に見たものは見知らぬ天井だった。

慌てて周囲を確認するが、目に入ってくるのは全く知らない部屋。

広さは十畳ぐらいとそれなりに広いが、内装は俺が寝ているベッド以外には机が一つと窓が二つついているだけ。

窓から外を見てみるが、やはりこの場所に見覚えはない。

「まさか…誘拐か？」

自分が置かれた状況を確認すると、とたんにパニックが襲ってきた。

やべえ、お、俺は殺されるのか？犯人はどこいった？うちに身代金を払うような余裕はないぞ。け、警察に連絡しなきゃ。でも、方法がないし…、携帯は持ってないしどうしよう…

なんだかんだで30分ぐらいパニックに陥っていたが、しばらくするとようやく落ち着いて来た。

待てよ、そもそも俺はどうやってここに連れて来られたんだ？今朝だって普通に学校通って、放課後には演劇部の練習に出ただけだぞ？部屋に入る所までは記憶があるから、まさか学校に不審者が侵入して俺を連れ去ったのか！？

嫌な想像が俺の脳みその大部分を占めた時、ノックの音がして人が入ってきた。思わず「ヒィッ」と悲鳴を上げてベッドの中に逃げ込む。べっ、別にビビったわけではないんだからね！！

「山ノムネ？」

柔らかに綺麗な声がしたほうに顔を向けると、そこには美少女がいた。腰まである長さの透き通るような輝きを持つ金髪、海のように深い蒼色の瞳、赤ちゃんのようなピチピチの肌。

今まで見たことがない美少女の容姿に見とれてしまったが、この美少女が俺を誘拐した可能性があることを思いだし、慌てて距離を取り美少女に問いただしてみることにする。

「お、お前が俺を誘拐したのか？何が目的だ？うちに身代金を払う余裕はないぞ？」

美少女は俺の言葉を聞くとこてんと首を傾げた。その仕草と来たら、今まで一度も言葉を喋ったことのない赤ん坊でも「かわいい！！」といってしまうようなもの凄い破壊力だ。恐怖を忘れて見とれてしまった俺を責められる人間は1人もいないだろう。

金髪美少女は俺を右手の人差し指で指して何だか訳のわからない言語でブツブツ呟いている。美少女の指から「ピカッ」と光が出たかと思うと美少女が俺に話しかけてきた。

「言葉は通じますか？私が言っている言葉がわかりますか？」

とうやらさっき言った言葉は通じてなかったらしい。だから、もう一度美少女に質問を繰り返す。

「何が目的だ！？どうして俺を誘拐した！？」

俺の言葉を聞くと美少女はニッコリとしてその可愛らしい口から言葉を発する。

「誘拐なんてとんでもない。私は貴方を召喚したのです」

「はあっ！？」

俺の耳が腐っていない限り、今こいつは召喚といった。も、もしかして電波ってやつか？かわいい顔して厨二病患者って奴なのか？お気の毒に…

俺が哀れみの視線を向けると美少女は一瞬ムツとした顔をしたが、すぐに表情を笑顔に戻して言葉を紡いだ。

「嘘ではありませんよ。私達が召喚魔法で貴方を地球からこの世界『シエンライン』に呼び寄せました」

どうやらこの少女は重症らしい。見ているこっちが恥ずかしくなるくらい堂々と厨二病発言をしている。仕方がない、俺が正気に戻してやるとするか

「あのね、君。召喚魔法なんてないんだよ？魔法なんて存在しないの。そんなことより、君が俺を誘拐したんだろう？どうしてそんなことしたの？」

俺がさっきより優しく聞いてやると美少女は怒ったように反論して

きた。

「ですから、貴方のいた世界と違ってこっちの世界では魔法が存在するのです！現に貴方だって、魔術師100人による大儀式によって召喚されました！！」

「はいはい。そんなにいうなら魔法を見せてごらん？そうしたら信じてあげるから」

「言いましたね…。魔法を見せてあげるからよく見ていなさい！！」

『フレイムアロー』

美少女がそういつて手をかざすと空中から火の槍が飛び出して部屋の壁を破壊した。俺がビビりながら美少女をみると美少女は次々に手から水やら氷やら風やらを出し部屋を破壊していく。

あまりの光景に俺が呆然としてしていると美少女はこちらに顔を向け、再びニツコリと俺に笑いかけてくる。

「信じて頂けましたか？」

その声がどこか得意なのは俺の気のせいではないだろう。しかし、そんなことより目の前で行われた光景を見て美少女の言葉を信じざるをえなくなってしまった。

「えっ、マジで！？俺は本気で小説とかによくある異世界トリップしちゃったの？」

「異世界トリップという言葉の意味はわかりませんが、貴方が我々

によつて召喚されたのは事実です」

「そんなの困るよ。演劇部の公演だつて近いし、家族や友達にだつて会いたい。俺を今すぐ元の世界に戻してくれ」

「それは不可能です。こちらに召喚する魔法はありますが向こうに送還する魔法はありません。それに貴方に帰られては困るのですよ」
帰れないって言葉を聞いた瞬間、目の前の女に殴りかかろうと詰め寄ったがどういふわけか女に拳が触れる直前に体が動かなくなつた。

「改めまして自己紹介を。私はアリア・フォン・ジェラル。ジェラル王国第四王位継承者で御座います。気軽にアリアとお呼び下さい。」

そういつて目の前で固まっている俺に笑顔を向ける。今までの笑顔は見ているだけで心が暖くなるような可愛らしい笑顔だったが、今度の笑顔は見ているだけで心が凍りつくようなゾツとする笑顔だった。

「貴重な労働力たる異世界人に帰られては困るのですよ。貴方には死ぬまで私に仕えてもらいます。宜しくお願いしますね？勇者様？」

1・異世界にて―side B

私はジェラル王国の第四王位継承者。今日はジェラル王国の王である父の部屋に呼ばれている。気が重い…。父のことは尊敬しているが、どうにも逆らいがたい威圧感というかオーラというか…、とりあえず父といると緊張してしまうのだ。だから、父に呼ばれていると知ったときは思わず「げっ」などと淑女にあるまじき言葉を言ってしまった。

あゝ、もう父の部屋についてしまった。仕方ない気合をいれろしよう。深呼吸して、身だしなみよし！気合よし！さて、ノックをするようにしましょうか。

コンコン、「お父様、アリアです。よろしいですか？」

部屋の中から年月と威厳を感じさせる深く、渋みのある声で返事が返ってくる。

「うむ。入りなさいアリア」

私は扉を開けると、部屋に入る前に父に向かって一礼をする。たとえ娘であろうと父の前では礼儀を忘れてはいけないのだ。

「それで本日はどのようなご用件なのでしょうか？」

「お前ももう16歳だ。我が国の伝統に基づき、3日後に召喚の儀式を実行する」

召喚の儀式―ジェラル王国に伝わる伝統ある儀式。ジェラル王

国の王族は16歳になると儀式を行って異世界から自分専用の奴隷を召喚する。召喚された異世界人は『勇者』と呼ばれて死ぬまで王家のために働かせられる。なにせ、異世界人は私達と比べて体の頑丈さ・成長率ともにずば抜けているのだ。それに召喚された者は例外なくレアスキルを持っている。これほど使い勝手の良い奴隷は他にいない。このジェラル王国は異世界人を労働力とすることで発展したといっても過言ではない。

「だから、お前も3日後に備えて儀式の準備をしておきなさい。召喚した奴隷を縛り付けるための術式は覚えているだろう?」

「ええ、お父様。さっそく、準備に入りたいと思うのですが退出してもよろしいでしょうか?」

「うむ。儀式のために精神を集中しておきなさい」

ふゝ、やっと父のオーラから解放された。相変わらず無駄に威圧感がある人だ。それにしても召喚の儀式か。異世界人は何人か見たことがあるが、自分専用の奴隷となると話が違う。どんな人間が私の奴隷になるのだろう?出来ればカッコいい男の人のほうがいいなあ。よし、3日後に備えて準備をすることにしよう。

3日後、魔術師100人が私と共に召喚の間で儀式を行った。今回の儀式のリーダー役には私の魔法の師匠であり、小さい頃からの世話役であるグレンが任命されているので私も安心できる。

「姫様、儀式を始めてもよろしいですか?」

「うん。準備はバッチリよ、グレン。さっそくはじめましょう」

「かしこまりました。では、みなの方。これより召喚の儀式を行う
！！」

グレンの掛け声と共に魔術師100人が一斉に呪文を唱える。私も呪文を唱えなくては…

『きたれ、きたれ、異界の者よ。我はジェラルルの血筋の者ぞ。古に盟約に従い王家に従いし者を召喚したまえ』

私が呪文を唱えると魔方陣から黒髪の男の子が出てきた。私と同じくらいの年だろう。あんまりかっこいい顔ではなかったが、体も丈夫そうだし奴隷としては合格点をあげられるだろう。でも、気を失っているようだ。儀式に失敗してしまったのだろうか？儀式に詳しいグレンに聞いてみることにしよう。

「ねえ、グレン。彼は気を失っているようだけど儀式を失敗してしまったのかしら？」

「いいえそんなことはありませんぞ。儀式はちゃんと成功しています。おそらく、召喚する時に集まった魔力に当てられてしまったのでしょう。それより、姫様。はやく服従の呪文を彼にかけなければ」

グレンにいわれて気を失っている彼に服従の呪文をかける。服従の呪文をかけなければ異世界人は私達にとって危険な存在になってしまう。私が服従の呪文をかけ終わると、この少年は死ぬまで私達のために働くことになる。私達の都合で呼ばれて、私達のために強制的に働かせられることになるこの少年の未来を思うと哀れみを感じ

てしまう。

儀式が終わった後、私は彼を『勇者』専用の部屋に眠らせることにする。机とベッド以外には何も無い『勇者』にふさわしい部屋だろう。さて、父にも報告はしたし彼が目覚めるまでティータイムを満喫するとうとう。

3時間後、彼が目覚めたとの報告があった。なにやら部屋の中から独り言が聞こえたらしい。ふむ、私がじきじきに出向き彼の立場を説明してやるとするか。

私はノックをして部屋に入り、優しく声をかけてやる。

「目はさめましたか？」

彼は私のことを呆けたようにジロジロ見てきた。なんだ、こいつはまあ、わたしがあまりに美しすぎるのが原因なので許してやるとしよう。なにせ私専用の奴隷なのだ。寛大な心で接してやらねばなるまい。

「kdsufhaposdpojdi？」

なんだか訳のわからない言葉が返ってきた。言葉が通じないのかしら？文献によると召喚の儀式で召喚された者の言葉は自動翻訳されるはずなんだけど…、グレンはああいったけどやっぱり儀式に不具合があったのかしら？

首を傾げて考えにふけっていると、視線が強まった気がする。ここでぐだぐだ考えても仕方がないか。後でグレンや兄達に聞いてみるとうしよう。しかし、言葉が通じないのは不便だ。翻訳の呪文をかけることにする。

「言葉は通じますか？私が言っている言葉がわかりますか？」

私が呪文の成功を確認するために声をかけると、目の前の少年はとんでもない無礼な発言をしてきた。

「何が目的だ！？どうして俺を誘拐した！？」

よりもよって、ジェラル王国第四王位継承者にて自分の主である私のことを誘拐犯呼ばわりしてきた。あんまりの言葉に激高しかけたが、よく考えると彼は目が覚めたばかりなのだ。事情は何も知らない。私は寛大な心を持って彼を許してやることにしよう。コミユニケーションをはかるため私は笑顔を作り彼の間違えを正してやることにする。

「誘拐なんてとんでもない。私は貴方を召喚したのです」

「はあっ！？」

目の前の男は驚愕の表情を浮かべた後、こちらを哀れむような表情でみてきた。なぜ、私が奴隷ごときから哀れみの目で見られなくてはならないのだ。殺してやろうか、こいつ。いけないいけない、そういうえば文献には「異世界には魔法が存在せず、異世界人は皆魔法の存在を疑う」と書いてあった気がする。この男も魔法の存在を疑っているのだろう。

「嘘ではありませんよ。私達が召喚魔法で貴方を地球からこの世界『シェンライン』に呼び寄せました」

私が笑顔で優しく言葉を重ねると男は大人が幼児をあやすように優しく声をかけてくる。

「あのね、君。召喚魔法なんてないんだよ？魔法なんて存在しないの。そんなことより、君が俺を誘拐したんだろう？どうしてそんなことしたの？」

なんでわたしがこのような態度をとられなければならない！？いくら寛大な心を持つ私でも、もう堪忍袋の緒が切れた。

「ですから、貴方のいた世界と違ってこっちの世界では魔法が存在するのです！現に貴方だって、魔術師100人による大儀式によって召喚されました！！」

「はいはい。そんなにいうなら魔法を見せてごらん？そうしたら信じてあげるから」

この男は魔法を見せてみると言っただけで来た。むかつく、この私を哀れむような視線。見てなさい！度肝をぬいてやるわ！！

「言いましたね…。魔法を見せてあげるからよく見ていなさい！！」

『フレイムアロー』

やばい！部屋を破壊してしまった…。まあ、こいつが魔法を信じないから悪いのよね。しかし、こいつもの凄くビックリしてるわね。

なんだか気分がいいわ。よし、もつと他にも魔法を見せてやるとするか。

「信じて頂けましたか？」

一通り魔法を放った後に呆然とする私専用の奴隷に最大級の作り笑顔をして問いかけてやる。

「えっ、マジで！？俺は本気で小説とかによくある異世界トリップしちゃったの？」

「異世界トリップという言葉の意味はわかりませんが、貴方が我々によって召喚されたのは事実です」

「そんなの困るよ。演劇部の公演だって近いし、家族や友達にだって会いたい。俺を今すぐ元の世界に戻してくれ」

彼の言葉に一瞬、ほんの一瞬だが罪悪感が沸く。しかし、私はジェラル王国の王族なのだ。これから帰してくれと私に詰め寄る少年を支配して使いこなさなければならぬ。この程度のことには罪悪感を感じてはこの先とてもやっていけない。私は罪悪感を脳の片隅に追いやり少年にとって残酷な事実を告げることにする。

「それは不可能です。こちらに召喚する魔法はありますが向こうに送還する魔法はありません。それに貴方に帰られては困るのですよ」

私が少年に事実を告げると少年は私に殴りかかってきた。しかし、さきほどかけた『服従の呪文』の効果で私に拳が届く前にその動きを停止する。

彼が呪文の効果で動けない隙に主人たる私の名前を教えてやることにする。

「改めまして自己紹介を。私はアリア・フォン・ジェラル。ジェラル王国第四王位継承者で御座います。気軽にアリアと呼び下さい。」

そして私は少年にとって忌避すべき最悪の事実を告げる事にする。心を凍らせ、王族として、そして支配者としての笑顔を作り、目の前で固まっている哀れな少年に残酷で変えることの出来ない未来を告げる。

「貴重な労働力たる異世界人に帰られては困るのですよ。貴方には死ぬまで私に仕えてもらいます。宜しくお願いしますね？勇者様？」

2・偽りの誓い―side A

アリアとかいう自称俺の主人である女から色々説明をされて俺は現実に絶望した。

いわく、俺は奴隷としてこの世界に召喚された

いわく、服従の呪文をかけたので私（アリアのこと）に攻撃を加えることは出来ない

いわく、死ぬまで王家に仕えてもらうことになる。

これを聞いたとき、俺は理不尽な現実が認められずにキレた。目の前が真っ白になり、頭に血が上り、目の前で淡々と俺の未来を語るこの女を殴りたくて、殺したくて仕方がなかった。しかし、女に攻撃を加えようとすると体が動かなくなる。必死に体を動かそうとするがまるで石になったみたいで1mmも動かない。

「少しは頭が冷えましたか？」

女が俺に声をかける。

「ふざけるな！！どうして俺がお前の奴隷にならなければならない！さっさと俺を家に帰せ！！」

「さっき説明したでしょう？あなたを元の世界に帰す方法はないのです。それに、あなたは私の奴隷としてしか生きていく道はないのですよ？」

「どういう意味だ!？」

「あなたにかけた『服従の呪文』により、あなたの命は私が握っています。あなたが私の奴隷にならないのならば私はあなたを殺します」

「!!!!????」

ゾツとした。淡々と俺を殺すと宣言した目の前の女が怖くて仕方がなかった。その凍てつくような視線で、さっきいった言葉が嘘ではないと嫌でも解らせられてしまった。

「まあ、私としても出来るのならばあなたを殺したくありません。それにいやいやしたがつうな者も欲しくありません。だから、あなたに時間を差し上げましょう」

「どういう意味だ？」

「これからあなたのお仲間に会わせて差し上げます。あなたの先輩になりますね。その方とお話をすればあなたは自ら私に仕えることを選ぶでしょう」

そう言うとなんは侍女らしき人間を呼び、何事かを命令すると椅子を空中から取り出してその椅子に座る。先輩？まさか、俺以外にも召喚された人間がいるのか？しかし、いくら同じ境遇の人間に会ったとしても俺が自ら奴隷になるとでも思っているのだろうか？女の表情を伺おうとして顔を上げると目が合ってニツコリと微笑まれた。その顔があまりに綺麗すぎて状況を忘れてしまいそうになる。しばらく沈黙が続いたが、ノックの音が響き女が「入っていいですよ」というと背の高い、顔が異常に整ってる20代前半ぐらいの男が部

屋に入ってきた。

「よく来ましたね、タカヒロ。こちらにいる男の子はあなたの後輩であり、私専用の『勇者様』よ」

「はじめまして。私はタカヒロと申します。ジェラル王国王家に仕える忠実なる奴隷であり、王家専用の『勇者』の一人です」

俺も自己紹介をしようと思ったが、なぜか女にしないでいいと言われる。

「さて、あなたはタカヒロと自由にお話してください。どんな内容でも結構ですよ。私のことはいらないものとして扱ってください」

女の言葉に従うのは癪にさわるが、俺も同じ境遇である人と話したいので質問してみることにする。

「タカヒロさんも召喚されたのですか？」

「……」

「聞こえなかったのか？それともまさか無視された？もう一度同じ質問をするがやはり何も答えは返ってない。すると、女がクスクスと笑いながら言葉を発した。

「そういえば命令するのを忘れてました。タカヒロ、彼の質問に答えなさい」

「かしこまりました。」

そういうとタカヒロさんは俺の目を見て、その整った口からようやく質問に答えた。

「ええ、そうですよ。私もあなたと同じで召喚された人間です。だいたい5年ぐらい前のことですね」

「タカヒロさんも服従の呪文をかけられているのですか？」

「はい。私もあなたと同じで服従の呪文がかけられていますが、今の私にはそんな呪文不要です。そんな呪文がなくても私は喜んでジエラル王国王家の方々に仕えるでしょう」

「元の世界に帰りたいとは思わなかったのですか？」

「帰る？とんでもない。私の存在意義は王家の方々に使っていただくことです。元の世界には少しも未練がありません」

その後も、俺は元の世界に帰る方法とか、どうして大人しく奴隷の立場に甘んじているのかなど質問をするが、王家の人間を賞賛する言葉しか返ってこない。奇妙に思ったがそういう人なんだろうと納得する。しかし、次の質問で俺は最悪の真実を知ってしまう。

「タカヒロさん、どうしてこんなやつらに従っているのですか！？なんでこんなやつらのことを誉めることが出来るんですか！？」

「以前は私もあなたと同じで王家の方々に反抗的な態度をとっていました。しかし、国王様に魔法をかけていただき王家に仕える素晴らしいさを教えて頂いたのです。いまでは、王家の方々に反抗的な態度をとっていた自分が欠片も理解できません」

「!？」

俺が女の方を見ると、女は悪戯が成功して嬉しくて仕方がないというような笑顔で俺に説明をする。

「タカヒロは以前はあなたと同じで王家に反抗的な『勇者』でした。命を握っているといっても、反抗的な態度を変えなかったのがお父様が洗脳しちやいました。今では王家に最も忠実な『勇者』の一人なのですよ」

そういうと女は俺に笑顔を向ける。心を凍りつかせるゾツとする笑顔で…

「あなたも反抗的な態度を貫くようならタカヒロと同じように洗脳してもらうことになるかもしれませんね？」

心底震えがきた。今までの俺はどこか夢だと思っていた。しかし、目の前で洗脳された男と女のゾツとするような笑顔を見て現実だと解らされてしまった。俺が呆然としていると女から声をかけられる。

「あなたもいきなり召喚されて混乱しているでしょう。ですから、1時間だけ差し上げます。1時間後、私がこの部屋に来たときにあなたには死ぬか、洗脳されるか、自ら仕えるか選んでいただきます」

そういうと女はタカヒロさんを連れて部屋を出て行く。残された俺は絶望した。どうしてこうなった!?俺が何をしたというんだ!?父さん、母さん、助けてくれ…。嘘でもいいから夢だといってくれ…。俺は泣いた。鼻水をたらし、大声でわめき、赤ん坊のように泣いた。

しばらくして、ようやく泣き止んだ。大声で泣いたせいか、なんだか少し落ち着いて考えることが出来た。死ぬのは嫌だ、洗脳も嫌だ。だったら、奴隷になるしかない。しかし、奴隷ってどんな扱いなんだ？鞭でビシバシ叩かれたりするのか？これからの未来を思うと思わずため息がでる。何気なく部屋を見渡すと、あのクソ女が壊した壁が目に入った。

そういえばこれは魔法で壊されたんだよね…。小説だと召喚されたものは魔法を使えるようになるみたいだけど俺も使えるようになるのだろうか？壁をボーと眺めていると、壁の中から一冊の本が見えた。

なんだこれ？なんで壁の中に本があるんだ？誰かが隠したのかな…。中身を見てみよう

――――
七の月

俺はこの世界に召喚された。俺を召喚した男は高圧的な態度で俺に奴隷になれと命令してきた。ふざけるな。奴隷など絶対なるものか。絶対に元の世界に帰ってやる

――――
！？これは日記帳だ！！しかも俺と同じ異世界人の日記だ！！

――――
八の月

『勇者』になつて一ヶ月。なんと魔法がつかえるようになった。俺を召喚した男は国王だったらしい。あの男が目に入るだけで殺した

くなってくるが、今は我慢だ。俺の命はやつの手に握られているのだから…

九の月

異世界生活にも大分馴れた。『勇者』というのはこの世界の人間にとって貴重な戦力らしい。俺の他にも召喚されたやつらに会ったが、会ったのは全部戦場だ。そういえば、戦場で人を殺したとき何も思わなかった。

国王が言うには召喚された時に精神を少し弄ったらしい。ムナクソが悪い。絶対に元の世界に帰ってやる！

十の月

俺は元の世界に帰るために表向きは反抗的な態度を止めた。やつらに表向きは忠実な奴隷のように振舞うとする。でないと殺されてしまう。やつら、俺達のことを人間だと思ってない。物だと思っている。俺はやつらが恐ろしくて仕方が無い。明日から戦争がはじまるらしい。しばらく日記がかけなくなるなあ。

二十二の月

『勇者』になって一年が過ぎた。俺は忠実な奴隷を演じつつ元の世界に帰る方法を探していた。そして、ついに元の世界に帰る方法の手がかりを見つけた。明日、俺はその手がかりを手に入れる！！

二十三の月

一ヶ月にわたる拷問も終わり、やっと部屋に戻る事が出来た。結局

手がかりをてに入れることは出来なかった。俺は明日洗脳されるらしい。しかし、やつらの態度で元の世界に戻る方法があると確信した。俺はもう駄目だが、この日記を壁の中に隠しておくことにする。俺の次に召喚された者の手に渡ることを願って。俺の後輩よ、あきらめるな。今はやつらに従順なフリをして力を蓄える。元の世界に戻る方法は絶対にある。必ず元の世界にもどれ！！

ぬ同類に贈る

谷田部孝弘

まだ見

…これは、タカヒロの日記なのか？多分タカヒロは手がかりを手に入れようとして失敗して洗脳されたんだ。元の世界に戻る方法はあると書いてある…。いいだろう、タカヒロさん。俺は絶対に元の世界に帰ってみせる。そのためならあの女にだって尻尾をふるし、やれと言われれば靴だって舐めてやる。演劇部のホープの名にかけて奴隷の役を演じてやるさ。

俺は日記を机の中に隠すことにした。この日記はあの女に見せてはいけない気がする。俺が机に日記を隠すとノックの音が聞こえた。どうやらもう1時間が経ったらしい。

「ご自分の未来を選ぶ事はできましたか？」

女が俺に問いかけてくる。俺は女の前で跪き返答をする。

「俺をあなたの、アリア様の奴隷にして下さい。あなたのためなら何だってしましょう」

アリアはニツコリと笑い納得したように頷いた。

「賢い選択をしましたね。では、付いてきて下さい」

俺はアリアに付いていくと王座がある部屋についた。王座には無駄に威圧感がある中年の親父が座っている。アリアの説明によると、俺は国王の前でアリアの『勇者』になることを誓うことになるそうだ。代々伝わる伝統の一つらしい。

アリアと一緒に国王の前で跪くと国王が俺に話しかけてきた。

「お前がアリアの『勇者』になるものか？」

「はい。アリア様や王家の皆様方に忠誠を誓わせていただきます」

「名は何と言う？」

「遠藤蒼也と申します」

「よろしい。アリアよ、これより着任の儀式を行う」

俺が跪いたまま姿勢を崩さずにいると国王が腕を上げて俺達に問いかけてくる。

「ジェラル王国国王の名前においてアリアに問おう。お前はソウヤを『勇者』として認めるか？」

「認めます」

「ではソウヤよ。お前はアリアを永遠の主として忠誠を誓うか？」

「はい。永遠の忠誠を」

（偽りの忠誠だけだな）

「永久に王家に仕えることを誓えるか？」

「王家のために私を使ってください」

（絶対に元の世界に帰ってやる）

「では、ソウヤをアリアの『勇者』と認め王家の所有物として認定する。以上で着任の儀式は終わりだ。退出するがいい」

「はっ。失礼させていただきます」

俺が部屋を出るとき、国王は祝いの言葉をアリアにかけていた。アリアも嬉しそうに笑っている。そんな光景を見て俺は誓う。

（今だけだ。今だけは従順な奴隷を演じてやる。そうやって、余裕を見せている。力を蓄えて、元の世界に戻る方法を見つけたら必ずお前らを殺してやる。絶対にだ、絶対に殺す）

こうして俺の異世界生活は始まったんだ…

2・偽りの誓い―side B

私が目の前の彼に事情を説明してあげたら、彼は私に殴りかかって来た。しかし、呪文の効果で先程のように固まった。こいつは学習しないのだろうか？それになんで殴りかかるのかしら？異世界人って野蛮人なの？

「少しは頭が冷えましたか？」

私が落ち着けという意味を込めて直々に気遣いの声をかけてやる。

「ふざけるな！！どうして俺がお前の奴隷にならなければならない！さっさと俺を家に帰せ！！」

むっ。さっきと同じ質問をしてきた。やっぱりこの人は頭が悪いのかしら？それに、元の世界に帰る方法なんて存在しないのに…

「さっき説明したでしょう？あなたを元の世界に帰す方法はないのです。それに、あなたは私の奴隷としてしか生きていく道はないのですよ？」

「どつという意味だ！？」

「??? どうしてこの人はわからないのかしら？さっき説明してあげたのに…」

「あなたにかけた『服従の呪文』により、あなたの命は私が握っています。あなたが私の奴隷にならないのならば私はあなたを殺します」

「!!!!???.」

私が支配者としての顔を作り改めて呪文の効果について説明してやる。すると、彼は見ているこっちがかわいそうになるぐらい怯えた表情を見せた。嗜虐新を刺激されたが、騾のためにここで救いの言葉をかけてやる。兄いわく『勇者』の騾にはアメとムチが大事なのだそうだ。

「まあ、私としても出来るのならばあなたを殺したくありません。それにいやいやしたがつうな者も欲しくありません。だから、あなたに時間を差し上げましょう」

「どういう意味だ？」

「これからあなたのお仲間に会わせて差し上げます。あなたの先輩になりますね。その方とお話をすればあなたは自ら私に仕えることを選ぶでしょう」

私は部屋の前に待機していた侍女にタカヒコを呼ぶように命令した後『クリエイト』の呪文で椅子を作り出して座ることにする。ふふっ。目の前の彼は驚いているみたい。しばらく彼を観察していると何かを考え込むような顔をした後、私の顔を見てきた。あっ、目があった。まあ笑顔でも見せてやるか。

彼は私の顔を見たまま何も言葉を発しない。何か用なのかと問おうとしたらノックの音が部屋に響いた。

私が入室の許可を与えると王家専用の『勇者』の一人であり、小さい頃は良く遊んで貰ったタカヒコが入ってきた。

「よく来ましたね、タカヒロ。こちらにいる男の子はあなたの後輩であり、私専用の『勇者様』よ」

タカヒロが自己紹介をした後、彼も自己紹介をしようとするが私が止めた。だって、私ですら彼の名前を知らないのよ？『勇者』ごときが主たる私より先に彼の名前を知るなんて許せない！

「さて、あなたはタカヒロと自由にお話してください。どんな内容でも結構ですよ。私のことはいらないものとして扱ってください」

彼がタカヒロに質問するが、タカヒロは答えない。???どうしたのかしら？タカヒロが無視するなんてありえないのに…。あつ、そういうばタカヒロは王族の誰かが許可を与えないと初対面の人間とは喋らないんだ。私ったらうつかりさん。フフフ。

「そついえば命令するのを忘れてました。タカヒロ、彼の質問に答えなさい」

「かしこまりました。」

彼が質問してタカヒロが答えている様子を眺めていると、ふと昔のことを思い出した。タカヒロは昔は「私」なんていわないで自分のことを「俺」って言ってた。こんな丁寧な感じじゃなくって、もっと活発的なお兄さんだった。小さい頃はよく鬼ごっこかして遊んだなあ…

でも、父に洗脳されてこんな風になってしまった。私達王族の命令は絶対遵守。許可が出ない限り余計なことはいしない。洗脳された彼を見たとき、私はショックを受けた。だって以前のタカヒロとは別人だったんだもの。一緒に鬼ごっこだってしてくれない。以前は私

のことをアリアって呼んでいたのに今はご主人様って呼ぶ。

でも、父を責めることは出来ない。だってこの国において父の行動は絶対なもの。それに、こんな風になったのはタカヒロのせいだもの。兄がいうにはタカヒロが父を殺そうとしたそうだ。だったら、自業自得よね。

あつ。彼どうやらタカヒロが洗脳されていることに気づいたみたい。だから、言ったでしょう？貴方は自ら私に仕えることを選ぶって…

「タカヒロは以前はあなたと同じで王家に反抗的な『勇者』でした。命を握っているといつても、反抗的な態度を変えなかったたのでお父様が洗脳しちゃいました。今では王家に最も忠実な『勇者』の一人なのですよ」

ここでわたしは彼に恐怖を与えることにする。意識して残酷な笑顔を作る。

「あなたも反抗的な態度を貫くようならタカヒロと同じように洗脳してもらうことになるかもしれませんね？」

彼は震えている。私が怖くて仕方がないみたい。そんな姿を見るとなんだかわいそうになってくる。彼の怯えている様子を見るのが辛い。それに今にも自殺しそうな気がする。よし、彼に考える時間をあげよう。

「あなたもいきなり召喚されて混乱しているでしょう。ですから、1時間だけ差し上げます。1時間後、私がこの部屋に来たときにあなたには死ぬか、洗脳されるか、自ら仕えるか選んでいただきます」

私はタカヒロを連れて部屋をでた。さて、1時間何をしようかしら？さつきティータイムは満喫したしな。私が悩んでいると横から声をかけられた。

「姫様、彼の様子はどうですか？」

グレンだった。そういえば、グレンには聞きたいことがあった。よし、この時間を利用して疑問を解消するでしょう。

「ねえ、グレン。召喚された『勇者』の言語は自動翻訳されるのよね？」

「はい、そうですぞ。魔方陣に翻訳の術式が組み込まれていますからね。」

「でも、彼言葉が通じなかったの。私が翻訳の呪文をかけるまで異世界語を喋っていたのよ」

「なんですと!？」

そういうとグレンはぶつぶつとその場で考え込んでしまう。どうやらグレンにも原因がわからないらしい。

「私、召喚で失敗してしまったのかしら？」

私が一番不安に思っていたことをグレンにたずねると、グレンは笑いながら答えてくれた。

「大丈夫です。彼はちゃんと召喚されていますし、魔方陣にも間違いはありませんでした。まあ、言葉が翻訳されなかったのはなんら

かの原因で翻訳の術式が作用されなかったのでしょうか」

「そうそう。肝心なことを忘れていました。召喚された『勇者』が落ち着いたら王の間で着任の儀式を行うそうですよ。国王様から直々に承認のお言葉をいただけるようです」

着任の儀式——まあ簡単にいつてしまうと召喚された者を『勇者』として認めるだけの簡単な儀式。でも変なの。兄や姉のときはグレンが着任の儀式を行ったのに。なんで私の着任の儀式だけ父が行うのかしら？

「わかりました。お父様に伝えていただけますか？1時間後に『勇者』と共にお父様の下に出向きますと」

グレンは私に一礼して去っていく。さて、疑問も解決したし本でも読むとしますか。

1時間後、私は彼の部屋に向かった。どんな選択をするのかしら。まあ、確実に私に仕えることになるのだけど。

「ご自分の未来を選ぶ事はできましたか？」

「俺をあなたの、アリア様の奴隷にして下さい。あなたのためなら何だってしましょう」

彼は私にむかって跪いた。1時間前とはえらい変わりようね。何かあったのかしら？それとも、ようやく私の偉大さに気づいたのかしら。まあ、当然よね。私はこの国の王族だもの。

「賢い選択をしましたね。では、付いてきて下さい」

私は彼を連れて王の間に向かう。王の間に向かう途中。着任の儀式が行われることを説明する。それにしても何か忘れているような…王の間について父の前で跪く。うつつ、この威圧感。相変わらず苦手だな。

「お前がアリアの『勇者』になるものか？」

「はい。アリア様や王家の皆様方に忠誠を誓わせていただきます」

彼が父の前で私に忠誠を誓う。

「名は何と言う？」

「遠藤蒼也と申します」

あつ。そうだ、名前を聞くのを忘れてた。くっそ、私より先に彼の名前を知るとは…。私のミスとはいえ納得いかないわ。

「よろしい。アリアよ、これより着任の儀式を行う」

父が両手をあげて着任の儀式を行う。

「ジェラル王国国王の名前においてアリアに問おう。お前はソウヤを『勇者』として認めるか？」

「認めます」

「ではソウヤよ。お前はアリアを永遠の主として忠誠を誓うか？」

「はい。永遠の忠誠を」

「永久に王家に仕えることを誓えるか？」

「王家のために私を使ってください」

「では、ソウヤをアリアの『勇者』と認め王家の所有物として認定する。以上で着任の儀式は終わりだ。退出するがいい」

「はっ。失礼させていただきます」

着任の儀式が終わると、ソウヤは部屋から出された。私は父の下にむかう。

「アリアよ。無事に『勇者』を召喚できたようだな。おめでとう」

「ありがとうございます、お父様。」

「無事に専用の『勇者』を召喚できたお前に伝えたいことがある」

「なんでしょうか？」

「うむ。まず召喚された『勇者』は攻撃的になる。人を傷つけることに躊躇いを持たなくなるのだ。だから簡単に人を傷つけるし殺意をいだきやすい。まあ、服従の呪文のおかげでお前に危害を加えることはできないが一応注意しておきなさい」

「それと、簡単に『勇者』を信じるな。やつが表向きは忠誠的な態度をとってもそれは演技だ。現にやつのは反抗心で満ち溢れてお

ったわ」

…私に跪いたのも演技だったのかしら？私って騙されやすいの？

「でしたら洗脳するのですか？」

自分で言っておきながら嫌悪感がわいた。私の『勇者』にはタカヒ口みたいになって欲しくない。

「いや。洗脳の魔法は面倒だ。それにやつはお前に反抗する事は出来ない。いいか、アリア。『勇者』は道具だ。決して感情移入するものではない。やつを王家のために使いつぶしてやれ」

「かしこまりました。」

父の前では了解したけど、感情移入しないのは難しい。だって、彼が帰りたいといったとき私は罪悪感がわいた。父や兄達のように『勇者』を道具のように扱うのは今の私には出来ない。

「話は終わりだ。やつがどんなスキルを持っているか調べておきなさい」

こうして、私は専用の『勇者』を手に入れた。彼との生活はここから始まったのだ。

3・レアスキル

「これからあなたのスキルを調べます」

俺の部屋に来たアリアは俺についてくるように命令をした。

「どこにいくのですか？というよりスキルってなんですか？」

アリアは俺にスキルについて説明してくれた。

異世界から召喚された者には必ずレアスキルが宿っているらしい。レアスキルというものは例外なく強力なもので、200年前の『勇者』は1人で町を更地に戻す事ができたらしい。

やっべ〜。更地に戻すとかどんだけだよ。っていうか、俺にもそんなスキルが宿っているのか？なんというファンタジー。ちよっとデーションあがってきた〜。

「これから向かうのはお父様専用の『勇者』の一人、『真実』の称号を持つカナの元です」

「カナ？俺と同じ異世界人なのですか？」

「ええ。ただ、あなたとは扱いの格がちがいますけどね」

その後もアリアは不満げにカナという人物について説明をしてきた。どうやらアリアはカナという人が嫌いらしい。アリアいわく何を考えているかわからない、王族を尊敬している態度が見られない、なんでお父様が特別扱いをしているかわからないなどなど延々と愚痴

をぶつけてきた。うゝむ、どんな人なのだろう？話を聞く限り洗脳はされていないみたいだが…

しばらく歩くと俺の部屋の3倍はありそうな豪華な部屋についた。どうやらここがカナの部屋らしい。

「カナ、あなたに見てもらいたい人がいるのですが」

「クククツ。おやおや姫様。ボクに用があるなんてとても珍しいことだね」

答えた人物は変な格好をした女の人だった。長い黒髪は後ろで縛りポニーテールにして、服は紫色のローブを纏っている。顔は美人なのに人を小馬鹿にしたような表情が魅力を台無しにしている。それにしても、召喚された人は何で美形ばかりなんだ？俺だって美形に生まれたかったさ、クソツ！！

「ええ。この度私も『勇者』を召喚したのであなたに彼のスキルを調べて欲しいのです」

「おやおやおや？『勇者』ときたか。ボクのお仲間さんになるのかな？後ろの彼がそうなのかい？」

カナさんが俺に顔を向けた。うゝむ、なんだか不気味な人だな。とりあえず自己紹介をしておこう。

「はじめまして、カナさん。今日『勇者』として召喚されたソウヤと申します」

「おやおや、それはご丁寧に。ボクの名前はカナ。気軽にカナ様と

呼んでくれたまえ」

…変わった人らしい。なんだかアリアの言っていることがわかる気がする。

「それでカナ様。俺のスキルを調べてもらえるのでしょうか？」

「クククツ。君は素直な人みたいだね。まさか馬鹿正直にカナ様と呼ぶとは。こんな愉快な人間には久しぶりにあった。姫様も中々面白い人間を『勇者』として呼んだじゃないか。カナさんでいいよ」

ブツ飛ばしてー！！今すぐ殴りてー！ま、殴らないけどね。

「自己紹介は終わったようですし、早く彼のスキルを調べて欲しいのですが？」

アリアは早くカナさんから離れたいようだ。俺もその意見には同意する。

「いいともいいとも。ボクのレアスキル『トゥルーアイ真実の目』なら彼のレアスキルなど瞬く間に見抜くことができるさ。さて、ソウヤくん。ボクの目の前に顔を持ってきたまえ」

俺は言われた通り顔を持っていく。うつ、やっぱり美人だね。女の子とこんなに至近距離で顔を近づけたことなんてないからな。なんだか照れるぜ。

俺が照れているとカナさんは俺と目を合わせてきた。さっきまでは黒い「THE・日本人」という瞳だったのに、今は金色の瞳をしている。俺はカナさんと目を合わせた瞬間に、アリアに感じたものと

はベクトルが違ふ恐怖を感じた。俺の過去・現在・未来、骨格・筋肉・性格など俺を構成する全てを見透かされたようないいのな
い恐怖を感じた。俺が震えているとカナさんはようやく目を外して
くれた。瞳も黒色にもどっている。

「クククッ。これは面白い。君は恵まれているね。素晴らしいス
キルだよ。そうだね、『リサイクルボディ再利用される体』とでも名づけておこうか
ね」

「リサイクルボディ？」

「君のレアスキルの名前さ。君のスキルの効力は無限の再生力。首
を切られようが、四肢をもぎ取られようが、全身を生きたまま焼か
れようが再生する。まあ、呪いや病気には君のスキルは通じないが
かなり強力なスキルだよ」

そんなことを言われても実感がわかない。俺は疑問の目をカナさん
に向ける。

「おやおやおや？信じていないのかい？仕方が無い見ていたまえ」

そういうとカナさんはどこから取り出したのか、ナイフで俺の頸動
脈を切りつけてきた。

「ギャー！！死ぬ死ぬ！！痛い痛い、血、血が！！は、はやく医
者を呼んでくれ！！」

アリアも頸動脈から噴水のように血を噴出している俺を見て慌てて
いる。

「わ、私専用の『勇者』が！カナさんなんということをなさるのですか！！??？」

「クククツ。二人ともウルサイよ。黙ってみていたまえ」

しばらくすると体に異変を感じた。あれほど噴出していた血がピタツと止まった。首の辺りにも違和感を感じた。俺が部屋にあった鏡を利用して様子をみると、ビデオを巻き戻ししているかのように瞬く間に傷が再生していく。

「クククツ。素晴らしいだろう？これが君のレアスキルさ」

なるほど、傷は全く残ってない。痛みも引いている。でも、不思議なのは俺がこの状況をすんなりと受け入れていることだ。確かに異世界トリップをしたことは認めた。でも、俺は凡人で召喚される前は再生なんかしなかった。

それなのに俺は再生される体を持ったことを疑問に思っていない。

「ありがとう、カナさん。おかげで私の『勇者様』のレアスキルがわかりましたわ」

「おやおやおや？姫様がボクにお礼をするとは珍しい。今日は雨でも降るのかな？」

アリアはカナさんの言葉にムツとすると、カナさんを睨み付けた。

「クククツ。そんなに睨み付けないでくれたまえ。それに礼には及ばないさ。これはボクの仕事であり、趣味でもあるのだから」

この2人の関係がわかった気がする。アリアがカナさんにからかわ

れているのか。それにしてもカナさんは不思議な人だ。この2人の様子を見る限りカナさんはかなり長くこの世界にいるのだろう。元の世界に帰りたいとは思わないのだろうか？それとも洗脳されているのか？

「これからソウヤに色々と教えることがあるので失礼させていただきますわ。ソウヤ、行くわよ」

「あ、はい」

俺が返事をする頃にはアリアは部屋を出て行ってしまった。俺が慌てて追いかけようとした時、カナさんが話しかけてきた。

「君が疑問に思っていることに答えてあげよう。ボクは元の世界に帰りたいとは思っていない。もちろん、洗脳だってされていない。ボクは望んでこの世界にいるのさ」

心を読まれたみたいでゾツとした。俺はカナさんのことをあまり好きになれそうにない。

「失礼しました」

俺はカナさんを睨み付け退出の言葉を口にする

「クククツ。君とは近い内にまた会うことになりそうだ。その時を楽しみにしているよ。あ、それとね？ボクは基本的に嘘付きなのさ」

カナさんの最後の言葉だけが耳に強く残っていた。

「クククッ。本当に面白い人間を召喚したものだ」

ボクは笑う。あの子は本当に面白い。あのスキルも素晴らしい！！

「今度の『勇者様』は何をしてくれるのかな？」

鼻歌を歌う。こんなに愉快的気分になったのは久しぶりだ。

「ボクが見た未来通りならとても面白いことになる。彼にはぜひとも頑張ってもらいたいね」

ボクは期待する。でも、何か行動を起こすわけではない。だって、ボクは傍観者なのだから。

「君の未来に祝福あれ！混沌の申し子よ」

3・レアスキル（後書き）

ストックが行方不明になった。これからは書けしだい投稿するので更新スピードは落ちるかも

お気に入り登録してくれた方ありがとうございます。
素人の拙い作品ですがお楽しみ下さい。

ご意見なども募集してます

4・金髪の貴族

カナさんの部屋から出た後俺はアリアに部屋に戻って寝るように言われた。

明日は早朝から戦闘訓練をやるらしい。正直不安で仕方がない。俺は生粋の文化系なのだ。演劇部の活動の一環で体を鍛えているが、喧嘩なんてしたことが無い。

今日は本当に色んな事があった。異世界に召喚されて、奴隷になって、傷がすぐ治る体になった。本気で勘弁して欲しい。体に異変はないがまるで別人になったみたいだ。そういえば、こっちに召喚されてからやたらとキレイやすくなった気がする。本来の俺は滅多にキレたりしないのに…

召喚されたばかりで興奮しているのか？何日か立てば元の俺に戻るだろう。さて、寝るとするか。せめて、夢の中では幸せになりたい。お休みなさい。

翌朝、目が覚めた。周りを見渡すと壁が壊れた広い部屋、すなわち俺が昨日寝た部屋にいる。

「やっぱり夢じゃなかったか。夢であって欲しかったのに…」

理不尽な現実を直視して思わず独り言を呟いてしまう。

俺は昨日の内に用意された服に着替える。中世の人達が着ていたような服だ。とりあえず俺の趣味には合わないと言っておく。

話しは変わるが、この世界でも1日は24時間と時間の流れや単位は地球と一緒に正しい。こつちの世界にも時計はちゃんとある。ただ、地球と違うのは1年が12カ月ではないこと。こつちの世界では1カ月は30日と決められていて、100カ月過ぎてようやく1年過つのだそうだ。

現在、AM 6時30分。なんで俺がこんなに早く起きているのかというと、あのクソ女を起こさなければならぬからだ。

アリアがいうには朝に主人を起こすのも『勇者』の仕事らしい。それにしても、なんで奴隷のことを『勇者』って呼ぶんだ？『勇者』ってのは魔王を倒す存在じゃないのかよ！！

俺がブツブツ文句を言っていると前にタカヒロさんが見えた。丁度いい、アリアの部屋を教えてもらおう。実は先程から迷子になっていたのだ。だって王宮って広いんだもん。だから俺が迷うのも当たり前だよ。うん、そうだ。俺は何も悪くない。

「おはようございます、タカヒロさん。お聞きしたいことがあるんですが」

「おはようございます、ソウヤさん。私に聞きたいことは何でしょう？」

「実はアリアに朝起こすように命令されてまして。アリアの部屋が

どこにあるかわからないんです」

「ああ、そうですか。アリア様のお部屋は少し戻って、1つ目の曲がり角を曲がった突き当たりの部屋ですよ」

どうやら俺はとうにアリアの部屋を通り過ぎていたらしい。タカヒロさんにお礼を言ってアリアの部屋に向かう。

す、凄い！！これが俺がアリアの部屋を見て最初に思ったことだ。まず、扉がとんでもない。間違いなく3mはある。それに、装飾に引くくらい金がかかっている。金・銀・ダイヤ・サファイアなどの宝石がちりばめられている。恐らく、この扉だけで俺の生涯年収に匹敵するだろう。

「アリア、朝ですよ。入りますよ？」

ノックをしても返事が無いので入ることにする。部屋の中も扉に劣らず豪華で、安月給のサラリーマンが見たら卒倒するぐらい金がかかっている。俺が5回生まれかわってもこれ程の金額を稼ぐことは出来まい。そんな部屋のお姫様ベッドでアリアは眠っていた。

やっぱり綺麗だな。二次元に出てくる女の子みたいだ。こんなに綺麗な人間がいるとは信じられん。思わずアリアの寝顔に見とれてしまう。これで俺のことを奴隷にするなんて言わなきゃな。綺麗な薔薇には棘があるってことか。さて、起こすのでしょうかね。

アリアを起こそうと綺麗な顔に見とれながら体に手を触れて揺するうとした瞬間、アリアの目が見開いた。状況を第三者が見たならば俺がアリアにキスをしようとしたように見えただろう。当然、アリアにもそう見えたはずだ。

「何をしているのですか？」

地獄の底から響くような声で俺に聞いてくる。目の前の少女が言ったとはとても信じられない。

「あ、いや、これはですね。キスをしようとなんてしてないで、ただ俺は純粹にアリアのことを起こそうとただけなんですよ」

俺が必死に弁解するとアリアは2、3度頷いてくれた。理解してくれたのかな？

「覚悟は出来ましたか？」

無表情で俺に聞いてくる。さっきまでは天使のような顔だったのに、今の俺には悪魔の顔にしか見えない。

「か、覚悟って何の覚悟でしょうか？」

俺がおそろおそろ聞くと今度は笑顔になって答えてくれた。

「もちろん、お仕置きを受ける覚悟です」

『フレイムアロー』

アリアの手から火の矢が出て俺に着弾する。

熱い！熱い！！火の矢が当たった場所は火傷で爛れていく。肉が焦げてしまったようだ。常人なら間違いないで死んでいるだろう。しかし、俺の体は普通では無いのだ。焼け爛れた皮膚は瞬く間に通常の

状態に再生していく。あれほど感じた熱さも痛みももう感じない。

「こ、殺す気ですか！？何するんですか！？」

「あなたはレアスキルのおかげで死なないでしょう？淑女レディに無断でキスをしようとしたんだからこの程度のお仕置きは当然です」

その後、色々説明をして誤解は解けた。この間何が起こったかは割愛する。ただ、部屋の前を偶然通りかかったメイドが言うには姫様の部屋からかすかにだが、怒鳴り声と必死に謝る男の声が聞こえたらしい。

「私は朝食を食べて来ます。あなたも兵士用の食堂で朝食を食べてきなさい。それと、食べ終わったら兵士服に着替えて訓練場で待っているように」

そういうとアリアはさっさと部屋を出て行ってしまう。っていうか…

「兵士用の食堂ってどこだよ…」

俺が食堂を探してさまよっている前に1人の兵士らしき人が見えた。朝といい、今日の俺はついていけるようだ。魔法で攻撃されたじゃないかって？そんなこと忘れたさ！！

「あの、すみません。兵士用の食堂ってどこでしょうか？」

「ん？俺も今から飯を食いにいくとこだが、お前さんは誰だ？見かけねえ顔だが」

「えっと、昨日『勇者』として召喚されたソウやっていいいます。アリアに兵士用の食堂で朝食を食べるようにいわれて…」

「おうおう、お前さんが姫様の『勇者』か。それなら食堂の場所がわからなくてもしょうがねえ。一緒にいこうぜ」

食堂までの間、楽しくお喋りをした。この人の名前はファムルスというそうだ。ファムと呼んでくれと初対面の俺に友達のように接してくれる。こつちの世界に来て初めてまともな人に会った気がする。

ファムさんはとても気さくな人のようで、召喚された俺を気遣いつつもこつちの世界について教えてくれたり、逆に地球のことについて質問したりと話をしていて面白い。まるで演劇部の先輩と話をしているようで、頼れる兄貴分って感じた。

話をしている間に食堂についた。食堂の席は兵士の皆様方でうまっている。見事に男ばかりでむさ苦しい感じがする。

「ここの飯はたいして美味くはないが量だけはたくさんある。ソウヤも腹一杯にはなるはずだぜ」

そういつてファムさんは俺の分まで料理を持ってきてくれた。朝食のメニューはパンとスープとサラダだった。ただし、サラダに入っているのは俺が今まで一度も見たことがない野菜だった。スープを一口飲んでみる。なるほど、味はほんとにたいしたものではない。なんというか全体的に薄味だ。パンも中途半端な柔らかさで口の中の水分が一気に持っていかれる。確かに腹だけは膨れるだろうが、これが毎日続くかと思うと憂鬱になる。

俺がパンを苦勞して飲み込んでいると食堂の入り口の方がざわついた。入り口の方を見ると豪華な鎧で身を包んだ金髪の男がお供らしき者数人を従えて悠然と立っている。彼はキョロキョロと辺りを見渡して誰かを探しているようだ。俺が男の方を見ると目が合った。男はとりまきを従えてこちらに向かって歩いてくる。

「ファムさん。こっちに来るあの人って誰ですか？」

「ん〜？げっ！！ありやイースト家の次男坊じゃねえか！！なんでこんなところにいるんだ？」

俺がイースト家とやらについて聞こうとした時、金髪の男が俺に話しかけてきた。

「貴殿がアリア様の『勇者』か？」

なんだか面倒くさそうだからスルーしたかったがこும்目を見て聞かれるとさすがに無視できない。

「え〜と、俺が一応そうですけど、何かごようでしょうか？」

「ふんっ！貧弱そうな身なりだ。貴殿のようなものがアリア様の『勇者』に選ばれるとはな。貴殿のようなものにはとてもアリア様をまかせることなどできないな」

いきなりの暴言に呆氣にとられてしまう。すると、ファムさんが立ち上がり俺のことを庇ってくれる。

「いきなり食堂に来て人を罵倒するとはなにごとだ！！ソウヤに謝罪しろ！！」

「おや、『平民將軍』殿ではないですか？貴方は短い間にその馬の骨と随分仲良くなったようですね？ま、將軍という身分にありながらもこのような家畜の餌に等しいものを食べるあなたにはお似合いいの仲間ですが」

イラッとした。ファムさんを馬鹿にしたばかりか、皆が食べている物を家畜の餌呼ばわりする無神経さにも。一瞬だが、殺意がわいた。目の前で傲慢に笑っている男の首をへし折り殺すことが出来たらどれだけ気持ちがいいのだろう…

「まあ、私もこんな場所には一秒足りともいたくはない。さっさと用件を済ませるとしよう。私は貴殿の戦闘訓練をするようにアリア様からご命令を受けた。朝食を食べ終わったら訓練場にくるがいい。貴殿より私のほうがアリア様にふさわしいと証明してやろう」

そついうと金髪の男はとりまきを引きつれ食堂からさつていく。金髪の男が視界から消えると、あれほど抱いていた殺意が綺麗に霧散する。昨日から俺はどうしたのだろうか？俺はこんなに簡単に人を殺したいと思うほど非道な人間だったろうか？自分のことが別人のように感じる。

「災難だったなあ。あんなやつが訓練担当になるなんて」

「なんなんですか？あの人。随分偉そうでしたけど」

「あいつは四貴族しきぞくの内の1つ、イースト家の次男坊でな。実力は確かなんだが、平民を徹底的に見下している嫌なやつなんだ。実家が四貴族だから上官も下手に注意出来ずにやりたい放題なんだよ」

「四貴族ってなんですか？」

「ああ、ソウヤは知らないんだったな。この国で王家に次いで権力を持つ4つの貴族のことだな。北方を領地とするノース家、東方を領地とするイースト家、南方を領地とするサウス家、西方を領地とするウエスト家の4つからなる莫大な財産と権力を持つ貴族連中のことだ。ソウヤも無事に過ごしたかったら、この4つの貴族とは敵対しない方がいいぞ」

「でも、さっそく敵視されている見たいですけど…」

「あゝ、あれはな、実はあいつ姫様の婚約者候補の1人なんだよ。あいつ自信も姫様の事が好きでな、姫様の周りにソウヤがいることが気に入らないんだろうよ」

貴族や王族には色々あるらしい。それにしてもあの年で婚約者が候補とはいえ決まっているとは…、2人とも俺と同じ年ぐらいだろうに…

それはともかくあいつは嫌な奴だな。アリアにふさわしくないだろ？お前に譲ってやりたいわ！！『勇者』の役なんて喜んで変わってやるわ！！あ、なんか思い出したらイライラしてきた。

「だからソウヤ、気を付けろよ。あいつなら訓練中の事故に見せかけてお前を殺しかねん。あいつは王族と貴族以外を人間扱いしていないんだ」

こわっ！！どんだけ物騒な奴なんだよ。しかし、あいつが俺を殺すことは不可能だろう。俺にはレアスキルがあるのだ。それにしても…
「金髪縦ロールって本当にいるんだな」

カール・イースト。イースト家の次男であり、魔法・戦闘ともにトップクラスの实力を持つ有望株。そんな彼の欠点の1つは髪型が変であること。

今日も彼の金髪縦ロールは輝いていた。

4・金髪の貴族（後書き）

次回はバトルシーンになります。ひょっとしたら時間がかかるかも

5・決闘（前書き）

なんとか書きあげました。バトルは難しいですね…
うまくかけているといいのですが…

P V 2000・ユニーク 500突破。ありがとうございます

そして新たにお気に入り登録して下さった方々もありがとうございます。

頑張りますのでこれからもよろしく願いします。

ご意見は募集中です。

5・決闘

「ふんっ。逃げずにきたみたいだな。これから私が貴殿を鍛えてやるっ」

俺がファムさんと別れて訓練場に行くとさっきの貴族が仁王立ちで待っていた。横にはアリアもいる。

「ソウヤ、こちら貴方の戦闘訓練の先生になるカールよ。挨拶をしないさい」

「おっと姫様。先程彼とは挨拶をしましたので。さっそく戦闘訓練を初めたいのですが？」

「あら、そうなんですか。私は魔法の勉強がありますのでソウヤのことを宜しく願いますね」

「おまかせ下さい」

アリアがこの場を去ると、金髪の男が俺に向かって剣を投げた。

危なっ！なんつうーもんを投げるんだこいつは。それにしてもこの剣重いな。よく投げる事が出来たもんだ。

「その剣を使って素振りをしろ。そうだな、1000回振れ」

1000回！？頭がおかしいのか、こいつは。こんなもん1000回も振れるわけねーだろ。

「どうした？素振りも出来んのか？それとも、貴殿のような馬の骨は剣の使い方も知らんのか。アッハッハッハ」

こ、こいつはなんて人をイラつかせることが上手いのだろうか。いいだろう、やってやろうじゃねーか！！

俺は黙って素振りを始める。出来るだけこいつとは会話をしたくない。剣を振ろうとしたら金髪が話しかけてきた。

「挨拶はどうした？仮にもお前は教える身だぞ。それとも貴殿のような愚図はそんな教育も受けていないのか？」

さっき挨拶はいいって言ったじゃねえかよ！！こいつ本当に性格悪いな！！

「よ、よろしくお願いします」

歯を噛みしめながら挨拶をしてやる。

「ふんつ。挨拶をする暇があったらさつさと素振りを始めろ」

こ、こいつは〜！！殺してやりて〜。いや、まてまて我慢だ。落ち着け、俺。

その後も素振りをしている間にもあいつは俺をイラつかせた。

「それが素振りのつもりか？」とか、「貴殿よりは赤子の方がマシだろう」とか、「こんなに才能が無い人間は初めてみた。歴史的大発見だぞ」とか。

いくら温厚な俺でも、もう堪忍袋の緒が切れた。もう奴隷の演技な

んか関係ねえ！！

「なんなんだよてめえは！！気に入らねえ事があるならはつきり言えよ！！」

「はっ、ならば言つてやろう。貴殿のような愚図が存在しているという事実そのものが気に入らない。そもそもこの城には貴族以外はいらないのだ。『勇者』なんか必要ない！」

この野郎は最悪だ。徹底された選民思想。現代日本に生きていた俺にとっては理解できない思想だ。

「てめえのどこが偉いっつうんだよ！！実家が偉いからって調子に乗ってんじゃねえよ！！」

「ほう。貴殿のような者が高貴なる私を侮辱するか。ならば、私と勝負をするか？貴殿に直接私の偉大さを教えてやろうではないか」

「やってやろうじゃねえか！！吠え面かかせてやる！！」

俺が了承の返事をするにあいつはニヤリと笑った。

「ならば準備をしてこい。貴殿に貴族の力を思い知らせてやる」

そう言つて金髪も準備のために訓練場を去っていく。しばらくすると冷静になってきた。やばい！はめられた。あいつは俺と勝負をすることが目的だったんだ。これなら俺をボコボコにしても合意の上の勝負だったで言い訳が通じる。

というよりどうしよう。決闘なんかしたことねえよ。戦いなんて

出来ねえよ…。挑発に乗ったさっきまでの俺をぶん殴ってやりたい。

「おい、ソウヤー！！大変なことになったな」

頂垂れる俺に声をかけてくれたのはファムさん。今の俺には誰よりも頼もしく感じる。

「ファムさーん！！どうしようー？俺、戦いなんかしたこと無いんです！もう逃げたいです…」

「逃げるのは無理だと思うぞ？お前、皆の前で決闘の了承をしちまつたし」

辺りを見渡すといつの間に來たのか、兵士の皆様が俺のことを見ている。俺と目が合うと皆が応援の言葉をくれる

「ガンバレー！！」

「前からあいつ気に入らなかったんだ。ぶっ飛ばしてやれ」

「死ぬなよ」

最後の人は負けること前提だよね？まあ、勝てないんだけどね。

「まあ、そんなに落ち込むなよ。おまえ『勇者』なんだろう？レアスキル使えば勝てるかもしれないじゃないか」

「俺のスキルはどんな怪我でも再生するだけなんです！！戦闘用のスキルじゃないんですよ！！」

「あゝ、とりあえず死ぬことは無い訳だ。そんな世界が終わったような顔するなよ。防具と剣は貸してやつから」

防具置き場に行つてファムさんに用意して貰った盾と兜をつけてみる。重つ！よくこんなものつけて動けるな。これで更に剣も持つんだろ？重くて動けないぞこりゃ。

「ファムさ〜ん。重みで動けないっばいです」

「あん？この程度の重さで動けないのかよ。鍛え方が足りねえな〜。しょうがねえ、兜は外しとけ。さすがのあいつも頭は狙わねえだろ」

兜を外して両手に剣と盾を持ち動いてみる。これならなんとか動けそうだ。

「ソウヤ、あいつは魔法剣士だが魔法の方に重点を置いた鍛え方をしている。だから、あいつの懐に入つて近接戦をやれば勝機はあるかもしれない。俺は観客席で応援してるぜ。ガンバレよ」

ファムさんはアドバイスをくれて訓練場に戻っていく。

ありがとうございます、ファムさん。勝てないかもしれませんが精一杯やってみます。

俺が訓練場に戻ると金髪はもう戻っていた。高そうな兜に鎧と盾とフル装備。剣も訓練場にあるものより明らかに高値なものだろう。

「どうして貴殿は兜をしていないのだ？余裕のつもりか？」

「うるせえ！お前ごときに兜なんか必要ねえんだよ！」

いや、本当は重くて動けないからだけだね。お前の装備が羨ましいよ。なんであんなのつけて動けるんだよ。

「ほーう。その余裕がいつまで続くか確かめさせてもらおうか」

そついうと金髪は構えをとる。

「我が名はカール・イースト。王家の剣であり、貴殿を倒すものだ。貴殿も名乗られよ!!」

名乗り〜？そんなもん考えてねえよ。どうしようかな？こんな場面めったに無いよな。厨二臭いけど、どうせ名乗るなら格好よくいきたいよな。

「俺の名前は遠藤蒼也。アリアの『勇者』であり、てめえをぶん殴るもんだ!」

ふっ、決まった。俺って格好よくね？主人公ばんざいつて感じじゃね？

「ではこれより決闘を開始する。勝利条件は相手に参ったといわせることだ。いくぞ!!」

金髪はいきなり俺に斬りかかってきた。盾で防ぐが盾が壊れる。続いて第二撃、右肩から銅にかけて斬られる。痛みを感じるがすぐに再生する。

俺は金髪に反撃しようとするが、あいつは俺の剣が届かない距離にすでに離れている。

「再生した！？なるほど、それが貴殿のレアスキルか！！」

金髪は驚愕の表情を浮かべた後、左手を俺に向けた。

「ならば、魔法はどうか？」

『アイスニードル』

金髪が左手を地面につけて呪文を唱えると無数の氷柱が上向きに地面から生えて俺に向かってくる。

そんな攻撃方法は防ぎようがなく、氷柱は俺の体に命中する。

右足を突き刺し、内臓を突き刺し、左胸に穴をあけて氷柱が消える。しかし、そんな大怪我を負っても瞬く間に傷は再生する。

ああ、俺は本当に人間じゃなくなっちまったんだな。こんな怪我を負っても再生するなんてな。それにしても今の俺はおかしい。こんな攻撃喰らったら、普段の俺なら怖くて震えているだろう。だけど、今は楽しくて仕方がない。闘えるということが嬉しくて仕方がない。「ちっ、化け物め！！ならば負けを認めるまで魔法を放ってくれるわ！！」

『フレイムアロー』

『アイスニードル』

『サンダーランス』

火の矢が俺の全身を焼き、氷柱が俺の身体を貫き、雷の槍が心臓目掛けてほとばしる。

全ての魔法が俺に命中するが、喰らうと同時に再生して何事もなかったかのように元通りになる。

「てめえのヒヨ口魔法なんか効かねえんだよ！！今度は俺の攻撃だ！！」

俺は走って距離を詰める。盾が無くなった分、速く動くことが出来る。焦る金髪に向かって剣を振り降ろすが左手の盾で防がれる。

剣を弾かれバランスを崩した俺に、金髪は胴体目がけて剣を振るう。剣が俺の上半身と下半身を別れさせようとするが剣が通ったそばから再生する。

「なるほど、貴殿には魔法も剣も意味がないのは理解した。ならばこれならどうか？」

金髪は剣と盾をその場に捨てて、鎧に包まれた右腕で俺の顔面をぶん殴った。あまりの威力に体ごと吹き飛んでしまう。

殴られた傷はすぐに再生するが衝撃のせいでふらついてしまう。

「やはりな。貴殿のスキルは攻撃のほとんどを無効化するが衝撃までは殺せないようだな？」

金髪はふらつく俺を正面から殴ってきた。その衝撃に倒れてしまう。

「この程度で負けを認めないよな？兜をつけといた方が良かったのではないか？」

「う、うるせえ…、これから俺が反撃してやるよ……」

「そつだよな？私ごとき余裕なんだよな、『勇者』様は。ふつ。私に逆らったことを後悔させてくれるわ！！」

金髪は俺に馬乗りになり顔面を往復殴打する。傷にはならないが衝撃で脳が揺すられる。俺も隙を見計らって金髪を殴るが鎧によって防がれてなんのダメージも与えることは出来ない。

「ほらほらっ、負けを認めたらどうだ？貴殿のような愚図は高貴なる私にはどう足掻いても勝てないのだよ！！」

おれが降参の言葉を言おうとすると金髪は俺の口を殴ってきた。衝撃のせいで何も言うことが出来ない。

ボコボコに顔面を殴られて脳が揺すられ過ぎたのか、意識が朦朧としてきた。

ああ、俺は何をしているんだろう…。なんで殴られてるんだろう？なんで勝負なんか受けたんだろう？レアスキルが判明して調子に乗ってたのかな…

後悔が頭をよぎる。それにしてもこの金髪は容赦がないな。俺は素人なんだからもう少し手加減してくれよ…

まだ金髪は殴ってくる。衝撃に意識が飛びそうになった時、頭の中に声が響いた。

…勝ちたいか？我が主よ

誰だよ、こんな時に…

…勝ちたいか？我が主よ

もう一度謎の声は同じ質問をしてくる。そりゃ、勝ちたいけどさ。俺じゃあいつに勝てないよ。ダメージだって少しも与えることが出来ないし。

…そんなことはない。主の力を持ってすればあんなやつなど雑魚同然だぞ？

そんな力があるならぜひ発揮したいね。それより何だか眠くなってきたよ。殴られ過ぎたのかな…

…主を殴る男は敵なのだろう？我が主の代わりに闘ってやろう。主はたっぷり眠るがいい

そんな言葉を最後に俺は意識を手離れた。

カールが馬乗りになってソウヤの頭を殴っている。

あゝ、ありややべえな。いくら再生するからってあんなに殴られたら死んじまう。俺自身ソウヤのことは気に入っているし、あいつを死なせたら姫様に合わせる顔がない。そろそろ止めるとしましょうかね。

俺が観客席から訓練場に降りてカールを止めようとした瞬間、ソウ

ヤが急に立ち上がりカールを突き飛ばした。

カールは吃驚している。そりゃそうだろう。さっきまで意識を失う寸前だった男が急に立ち上がったのだ。

「ずいぶん好き勝手にやってくれたものだな？」

ソウヤがカールを睨み付けた。こいつ、本当にソウヤか？別人のような視線の冷たさだぞ。

「今度はこちらの番だぞ」

そう言つて、ソウヤは右手を振り上げた。

「私を殴るつもりか！？先程までは貴殿の攻撃など届かなかったというのに！？」

「黙れ、雑魚が」

そう言つてソウヤはカールの鎧を殴った。するとさっきまでソウヤの拳を弾いていた鎧が簡単に壊れた。

「なっ！？」

カールは絶句している。

「この程度の威力か。主は力を完全に発揮出来ていないらしい」

ソウヤは次に呆然として立ち尽くしているカールの兜を殴った。兜

も鎧と同じように壊れた。

「なっ何をした！？どうして兜と鎧が壊れるんだ！！ミスリル製の物だぞ！！」

カールは完全にパニックになっている。俺だってその気持ちはわかる。パンチ一発で鎧を破壊するやつなんて聞いたことがない。

「お前にはもう飽きた。とりあえず死んどけ」

そう言っただけでカールはカールに近づいて腹を殴った。カールは意識を失う。

俺は確信した。こいつはソウヤじゃない。

足運び、間合いの取り方、スピードとさっきまでのソウヤとはレベルが違う。さっきまでの戦いをみるかぎりソウヤがカールを一撃で気絶させることなんか不可能だ。

ソウヤの姿をした奴は不満気に自分の右手を見ている。

「一撃で殺すこともできないのか…。予想以上に力を制限されているようだ。まあ、いい。とりあえずこの金髪を殺すか」

「おい、よせっ！！」

俺が静止の声をかけるとソウヤは此方に顔を向けた。

「お前はファムルスだな？なぜ止めるのだ？」

こいつ、俺の名前を知ってる？なんなんだ、こいつは。

「まあ、いい。主はお前のことを気に入っているようだ。お前の命令には従ってやろう。これからも主のことをよろしく頼むぞ」

そう言つとソウヤは気を失つて倒れる。おいおい、なんなんだこいつは。姫様もとんだ『勇者』を召喚したもんだね。

さて、ソウヤとカールを医務室に連れてつてやるとするかね。それにしても姫様になんて報告するべきか…

6・報告（前書き）

短いです

6・報告

グレンによる魔法の授業が終わり、私がソウヤの訓練を見にいらした時ノックの音が聞こえた。

「姫様、ご報告したいことがあります」

入ってきたのはファムルス・カブラー。貴族が優遇されるこの国で、弱冠28歳にして実力のみで平民の身でありながら將軍の地位を勝ちとった猛者だ。そのため、口の悪い貴族達からは『平民將軍』などという嫉妬と侮蔑を含んだ呼ばれ方をしている。

しかし、彼自身はそんな呼び方を気にもとめていない。性格はとても気さくで、私が最も信頼する兵士の1人である。

「なんの用ですか？ファムルス。貴方は訓練の時間ではないのですか？」

グレンの手前「第四王位継承者」の喋り方をする。ファムと2人の時は私も本来の喋り方で話す。

ファムは訓練場で起こったことを説明してくれた。

まさか、カールとソウヤが決闘をすることになるとは…、しかしこれは私のミスね。あの男にソウヤの訓練を任せたことは間違いだっただわ。

だいたいあいつ嫌いなものね。婚約者候補だかなんだか知らないけど私に馴れ馴れしいのよ！髪型だって変だし、あのキザな喋り方も

生理的に受け付けられないのよね」

「決闘をしたことはわかりました。確かにそれは問題ですけど、わざわざ貴方が報告に来る必要性は感じませんが？」

「実はソウヤについてなんですが…」

ファムの話聞いて驚愕した。パンチ一発で鎧を破壊する人間なんて聞いたことがない。彼のスキルは再生のはずよ。癩だけどカナの診断がハズれることなんてあり得ない。

私と同様にファムの話聞いて驚愕の表情を浮かべるグレンに聞いてみる。

「ねえ、グレン。『勇者』が持っているスキルは1つだけのはずよね？2つ以上持つことなんてあり得るのかしら？」

「私は『勇者』について研究していますが、2つもレアスキルを持つ『勇者』など見たことも聞いたこともありませんな」

グレンの言葉を信じるならば彼がスキルによって鎧を壊したわけではない。かといって力で壊したわけでもなさそうだ。どうやって鎧を壊したのだろうか？

「実はここからが本題なんです…」

ファムは一瞬躊躇った後いいよどむように私達に言った。ファムの言葉にグレンと共に呆気にとられてしまう。

鎧を壊したのはソウヤじゃなくて、ソウヤに乗り移った別の存在だ

ですって？

彼は疲れているのかしら。休暇をあげた方がいいのかしら。

「信じていただけないでしょうがこれは本当なんです。神に誓って私は姫様に嘘の報告などいたしません」

ファムの目は本気だ。私だってファムが嘘をついているとは思っていない。けどあまりに奇想天外な話でにわかには信じがたい事なのだ。

「グレンはどう思いますか？」

『勇者』に詳しいグレンに聞いてみる。グレンは顎髭をさすりながら呟くように言った。

「『勇者』については不明な点が多いのです。確かにファムルス殿のお話は荒唐無稽なものです。だけど、絶対にないと言い切れることは出来ません」

グレンにまで言われると信じざるをえない。ソウヤに憑依した人物は何者なんだろう？ひょっとして私は大変な人物を召喚してしまったのかしら？

私が思案をしているとファムが話かけてきた。

「実は姫様にお願ひしたいことがございます」

「お願い？私にですか？」

「はい。ソウヤの訓練の指導を俺にやらせてもらえないでしょうか？カールとソウヤは合わないようですし…」

願ってもないことだ。私だって最初はソウヤの訓練をファムに任せようとした。だけどカールが熱心に私にお願いするものだからその情熱に押しきられる形でカールに任せてしまったのだ。

「そういうことならお願いします。カールには私から伝えておきましょう。それとイースト家の方には私から言っておきましょう。面倒なことになりそうですから」

「ありがとうございます」

お礼をいってファムは退室する。部屋の中には沈黙が流れる。

「ソウヤに憑依した人物についてグレンはどう思いますか？」

「さっぱりわかりませんな。こんな事象は初めてです。私よりもカナ殿に聞いた方がよろしいかと」

2日続けてあの女の所に行くことになるとは…。仕方がない、あの女に聞くのが一番確実なものね。

この後すぐにカナの元に向かったが何だかんだとはぐらかされてしまった。ただ、「今は気にしなくてもいいよ。いずれは明らかにすることだからね。クククッ」というアドバイスだか予言だかわからない言葉を貰った。

私はしばらくソウヤについて頭を悩ませることになりそうだ。

7・迷いの森と少年 前編

俺が異世界に来て1カ月が経った。奴隷というから何をやらされるかと内心ビクビクしていたが、俺の主な仕事はアリアの世話と訓練のみ。執事兼ボディガードみたいなもんだそうだ。

あの決闘の後からファムさんに剣術を教えてもらっている。最近はどうやくまともに剣を振るうことが出来るようになった。ちなみに、俺は魔法を使いたかったのだがアリアの師匠であるグレンさんに見てもらったところ俺に魔力はないそうだ。

『勇者』としては珍しいが、過去にも魔力がない『勇者』はいたらしい。ただ、そいつらの共通点としては例外なく強力過ぎる力を持っていることだそうだが。

グレンさんの推測によると強力過ぎる力の代償だそうだ。しかし、何で俺には魔力がないんだ？再生が強力過ぎる力とは思えないのだが…

医務室で意識を取り戻した後、アリアやグレンさんに決闘について質問をされたがよく覚えていない。俺がボコボコに殴られたところまでは覚えているのだが、そこからは記憶は曖昧だ。

ファムさんにどうやって俺が金髪を倒したのか聞くといつも誤魔化されている気がする。

それに兵士の皆様方の反応もおかしい。俺が訓練場に来ると皆どこか俺と距離を置いているように感じる。俺は何かした覚えはないのだが…

話は変わるが、俺は現在森の中で迷子になっている。
何でこんなことになったのだろう…

それは朝のファムさんとの殺人的な訓練を終えて朝食を食べている
時だった。

「ソウヤ、試験をやるぞ!!」

俺の目の前でファムさんが爽やかな笑顔で宣言した。

「試験って何をするんですか？」

俺は怯えつつ尋ねた。ファムさんはとても気さくでいい人なのだが、
訓練になると別人のように厳しくなるのだ。この1カ月で気絶させ
られた回数は最早数えられないくらいだ。

「な〜に、そう難しいことじゃない。一般人でも出来る簡単な試験
だ」

「城の南方にある【迷いの森】に行つて魔法茸を取ってこい。姫様
が魔法薬を作るのに必要なんだそうだ」

「嫌です」

俺は笑顔で拒否の返事をした。だって迷いの森だろ？方向音痴を自
覚している俺にとっては最悪の場所だ。

「ちなみにお前に拒否権はない」

とってもいい笑顔で言った後、ファムさんが俺の後頭部を殴ろうとする光景を最後に俺は意識を失った。

それで気がついたら森にいた。気絶している間に連れてこられたらしい。俺が持っているのは魔法茸が書かれた絵と『魔物が出るけど気をつけるよ』というファムさん直筆の注意書が書かれた一枚の紙と剣のみ。

ファムさん、俺に死ねというのですか？せめて地図とコンパスは欲しかった…。俺はしばらくorzの状態で絶望した。よし、一刻も早く魔法茸を探してファムさんを殴りに帰ろう！

うつつ、暗いな。俺はお化けとか苦手なんだよな。今どこにいるかもわからないし。魔法茸どこるか普通のキノコすら見つからないぞ…。だいたい土地勘の無い俺を森に放り込むほうが無茶なんだよな。木で覆われているから空も見えないし、今何時なんだろう？今日中に城に帰れるかな？

しばらく歩いていると後ろの方から「ガサガサッ」と音が聞こえた。後ろを向くが誰もいない。なんだ！？お化けか！？いや、風で木が揺れたただけだよな、うん、きっとそうだ。それ以外にはありえない、だからお化けなんか「あゝ、何をしているのですか？」

「ぎゃあ~~~~~!!!」

俺は叫び声をあげてお経を唱える。

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏、俺は悪くないんです。悪いのは俺をここに放り込んだファムルスという男です。だから成仏してください。お願いします!!」

「あの、僕はお化けじゃないですよ?」

「へ?」

声がした方を見ると弓を肩に背負っている小学生高学年ぐらいの子供がいた。子供は俺の方をみて苦笑いしている。

「落ち着きましたか?それで、ここで何をしていますか?」
「ここは魔物が出るから危ない場所なんですよ」

随分のんびりとした子のようだ。俺に忠告してくれているようだがまるで危機感を感じない。

「いや、えっと、俺はファムさんを探して、魔法草に放り込まれて……」

まだパニックってる俺はしどろもどろにしか会話ができない。

「しかたがありませんね。怒らないでくださいね」

パンツ!!!こ、子供にビンタされた!?

「何するんだよ!？」

「あゝ、やっと落ち着きましたねゝ。貴方はだれですかゝ？」

言われてみればパニックが収まった気がする。改めて子供の方を見ると随分かわいい子がそこにいた。ショートカットのさらさらの茶色い髪の毛、大きくパツチリ開いたエメラルドのような翠色の目。将来が楽しみな子だ。

「あゝ、恥ずかしいところ見せちゃったかな？それより俺はいいとしてもこんなところで君は何をしているんだい？女の子が一人に来る様なところじゃないぞ」

俺が優しく聞いてやると女の子は笑った。

「あははゝ、僕は何回もここに來た事があるから大丈夫ですよゝ。それにお兄さんは勘違いしてますねゝ」

「勘違い？」

「僕は男ですよゝ。女の子じゃありませんゝ」

「男!?こんなにかわいいのに!？」

「はいゝ。正真正銘の男ですよゝ」

なんということだ…、こんなにかわいい男が存在したとは。男の娘ってやつか!？

「それで、お兄さんは誰なんですか？」

「あ、ああ。俺の名前はソウヤ。お城で世話になっている客人みたいなもんだ。ちよつと仕事で魔法茸とかいうキノコをさがしているんだ」

『勇者』ってことは無闇に言いふらさないほうがいいとファムさんに言われたからな。ここは客人でいこう。

「そうなんですか。僕はユキトっていいます。僕も魔法茸を探しているところなんで、良かったら一緒に行きませんか？」

ユキト？日本人っぽい名前だけど、この子は召喚された子じゃないな。日本人ならこんな瞳の色にはならないしな。それに『勇者』なら城にいるはずだ。

「それは助かる。実は俺は迷子になっててね。魔法茸がどこにあるかも知らないんだ」

「お兄さんは無謀なんですネ？知識が無いのに迷いの森に入るなんて。そんなことじゃ死んじゃうかもしれませんよ？」

「死ぬ！？どういうこと！？」

ユキト君の説明によると魔法茸はモゲラという魔物の背中に生えている角のことをいうそうだ。モゲラは一般兵士と同等の強さを持っており、熟練した兵士でも油断すると殺されることがあるそうだ。

何が魔物に気をつけるだ！！魔物と戦わす気満々じゃねーか！！俺はファムさんが筆筒の角に小指をぶつけるように呪いをかけること

にした。

「それじゃー森の奥までいきましょか。モゲラは日中は活発に動きますからすぐに見つけられるとおもいますよ」

どうやら俺がいた場所は森の入り口に近いところだったらしい。迷子になってた俺っていったい…

迷いの森と呼ばれるだけあって森の中に目印になるようなものはなく道も入り組んでいる。そんな森をユキト君は馴染みの道のようにスイスイ進んでいく。本当に何回も来たことがあるようだ。この子は何者なんだ？それともこの辺の子供はこの森で遊んでいるのか？

「モゲラは通常なら怖い相手ではないですけど、怒ると強くなるから気をつけてくださいね」

「どんなことをすればそのモゲラとやらは怒るんだい？」

「そうですね、尻尾に触られると怒るみたいです」

「ちなみに強くなるってどれくらい？」

「通常の状態を10とするのなら、30ぐらいにはなりますね」

3倍かよ！？こええ。尻尾だけは絶対に触らないようにしよう。

「モゲラは基本的に突進しかしないので、正面に立たないようにしてくださいね」

突進か…、俺のスキルは外傷を与えてくる攻撃には強いが突進など

の衝撃をメインとしている攻撃には相性が悪い。絶対にダメージを食らわないようにしなきゃな。それにこの子に俺のスキルを見せたくはない。再生していく様子なんかトラウマもんだからな……。さつさとモゲラを倒して城に帰るとするか。

8・迷いの森と少年

後編（前書き）

主人公は戦闘になると豹変します。

PV 5500 ユニーク 1200突破！！こんな拙い作品を見ていただきありがとうございます！

さて、4月から学校が始まるので毎日更新が出来なくなります。よってこれからは不定期更新ですね。

今回は後書きを書きましたので是非ご覧下さい。

新たにお気に入り登録して下さいの方々ありがとうございます。

どのようなご意見でも随時募集しておりますのでこれからも応援よろしく願います。

「お兄さん、モゲラがいましたよ」

ユキト君が指を指す方向を俺は見ると、話は変わるが、皆はモンスターハンターをやった事があるだろうか？プレイヤーがハンターになってモンスターを倒したりするゲームだ。数あるシリーズに共通して登場するドスファンゴにモゲラを足して2で割ったような異形の怪物がそこにいた。背中にはちょこんと申し訳なさ氣に角のようなものが1本だけ生えていて、お尻からは長い尻尾がだらんと垂れている。

おいおい。ゲームだと何回も殺しているけどリアルで見るとこんなに怖いのかよ。よくゲームのハンターはあれを殺せるもんだ。

「あの角が魔法茸ですよ。さいわいモゲラは僕たちに気づいていないみたいですし、不意打ちで殺してしましましょうね」

そういうとユキト君は持っていた弓を構える。

「ユキト君待つんだ！そんな弓では一撃で殺せそうにないぞ！ここは一端距離をとって、大丈夫ですよ見ていてくださいね」

静止の声をあげる俺を無視してユキト君は矢を放つ。矢は拳銃の弾のようにものすごい勢いで放たれモゲラの脳天を直撃して貫通する。

す、すげえ！！あの怪物を貫通させるなんてどれほどの威力があるんだ！？ファムさんとの訓練で弓の練習をした俺にはわかる。この子はただ者じゃない。

矢を食らったモゲラはその場に崩れおちる。ユキト君はモゲラの死体に近寄って角を素手でへし折る。

「意外と簡単に倒せましたね。もう少ししてこずるとは思っていたんですけど」

「ユキト君。モゲラの角って一本しかないのかい？」

「そうなんですよ。モゲラの角は一頭につき1本しか生えていないですよ。僕は魔法茸がたくさん必要ですから、モゲラをたくさん倒す必要がありますね」

うむ、これで終わりじゃないのか。しかし、さっきはビビッてしまったが今度こそは俺も活躍したい。せっかく訓練したんだ、自分がどれだけ強くなったか確かめたい。それに何より小学生ぐらいの子供に戦闘を任せて何もしないなんて情けなさ過ぎる。

「でも、今日はどうもおかしいみたいでモゲラが中々見つからないんですよ」

「じゃあユキト君。二手に分かれてモゲラを探索しないか？」

「二手に？僕は別にいいですけど、お兄さんは戦えるんですか？それに道に迷う可能性がありますよ？」

「大丈夫！俺だってこう見えてそこそこ戦える。それに木に目印をつけるから迷子になる心配もない」

「だったらいいんですけど。じゃあ僕は右の方を探すんで、お

兄さんは左の方を探してくださいね。だいたい1時間ぐらいたったらこの場所に戻ってきてくださいね。」

そういうとユキト君はのんびりとした口調に似合わず凄いスピードで右方向に消えていく。

はやっ！？どんなスピードだよ！？もしかして移動のスピードは俺に合わせていてくれたのか？子供に気を遣われる俺っていったい…

落ち込んでいても仕方がない。俺もモゲラを探すとするかね。

しばらく森を探索するがモゲラはいっこうに見つからない。

モゲラ見つからないな。それにさっきはユキト君の手前見栄を張ったけど実際問題どうやって戦ったらいもんかね？俺の武器は剣だしな。まあ、尻尾にだけは触らないようにしないな。

それにしてもずっと歩きっぱなしで疲れた。杖になるような長い木は落ちてないかな？ん、おっ！！長い木の枝発見！！

なんだこの枝？ピクピク動いてる？それに長さが半端ないみたいだな。茂みに隠れて先っぽの方が見えないや。よしっ！剣で丁度いい長さに斬ろう。

俺は剣を木の枝に向かって振り下ろす。「ブチュ！」剣が木の枝を斬る音がした。うん？ブチュ？木の枝ってこんな音したっけ？

『ブゴオオオオオ！！』

突如、雄叫びが聞こえた。音の方を見るとそこにはモゲラがいた。

ただ、さっき見たモゲラとは違う。目が血走り、全身の毛を逆立て、半分に切れた尻尾は天を突くように上向きになっている。

あれ？俺が斬ったのってモゲラの尻尾？母さん。俺、やつちまったよ…

アホなことを考えていたらモゲラが俺に向かって突進してきた。

ドーン！！衝突して、ボキボキ！！骨折して、ガツガガガ！！吹き飛ばされ地面に転がされる。

おいおいマジかよ！！一撃で全身の骨を折るとかどんだけの威力だよ！？

俺が立ち上がるとモゲラはまた俺に向かって突進してくる。

俺が紙一重でをかわすとモゲラが衝突した木が折れた。
クソッ！！やってやるうじゃねえか！！

剣を振り上げモゲラの背中目掛けて振り下ろす。

ちっ！浅いか。斬るには斬れたがダメージを感じている様子はない。

モゲラが俺の方を向きまた突進してくる。俺は右方向に避けてすれ違いざまにモゲラを斬りつける。

モゲラはその場で方向転換をして再び俺目掛けて突進をする。突然

のことで対応が出来るはずもなく俺はモゲラの突進を正面からくらう。

痛っ！どうやら吹き飛ばされた俺は木に衝突したらしい。その証拠に枝が俺の胴体から突きでている。だから流れる血を無視して枝を体から抜く。すると瞬く間に再生して元通りになる。

表情はわからないけど、モゲラもビックリしているみたいだ。まあ、致命傷だと思っていた人間が何事もなかったように立ち上がるんだ。ビックリするのも当然か。それにしても…

「ああ、楽しい」

熱い。全身の血液が沸騰しているみたいだ。

「命のやり取りがこんなに楽しいなんて…」

頭の中が殺意と敵意で一杯になる。モゲラを殺すことしか考えられない。

「あははははは！」

こんなに笑ったのは久しぶりだ。俺は今、心の底から歓喜している。

モゲラは俺を見て戸惑っているようだ。やがて怯えたようにジリジリと後退している。俺の雰囲気が変わったことに気付いたらしい。

「おいおい、逃げるなよ。ようやく楽しくなってきたんだ。もっと楽しもうぜ？」

モゲラの全身が震えている。俺に怯えているようだ。

「そんなに怯えるなよ。すぐに殺したくなってくるだろ？」

ああ、もうダメだ。もう我慢出来ない。震える体、怯える目、その全てが俺を殺意の渦に沈ませる。

今すぐお前を

コワシタイ…

俺は剣の先を前方に向けてモゲラに向かって突進する。妙な気分だ。さっきまで突進されてた俺がモゲラに突進することになるとはな。

モゲラは覚悟を決めたように体勢を立て直して、俺に向かって突進してきた。

それでいい。全力で殺し合わないと楽しくない。

剣とモゲラが衝突する。さっきまでの俺ならたやすくモゲラに吹き飛ばされていたろう。だが、今の俺は負ける気がしない。剣がモゲラの顔面を貫く未来しか想像出来ない。

俺の思った通り、剣はモゲラの顔面を脳天に向かって突き刺す。俺にもモゲラの突進による衝撃が伝わるが何とか持ちこたえる。

モゲラの死体が崩れ落ちる。

「あははははははは！！」

俺は狂ったようにしばらく笑い続けた。

しばらくすると冷静になってきた。目の前にはモゲラの死体がある
あれ？これ、俺がやったのか？うゝん。モゲラと戦っている時の記
憶はあるけど、どうも記憶が曖昧だ。

こつちの世界に来てからの俺はどうも変だ。戦闘になると頭に血が昇って記憶が曖昧になる。タカヒロさんの日記にあったように俺の精神も弄られたのか？

まあ、考えていてもしょうがないか。さつさと角を折って待ち合わせ場所に向かおうかね。

俺が待ち合わせ場所に行くとユキト君はすでにいた。

「遅かったですね。モゲラは見つかりましたか？」

「ああ、何とか1頭倒すことが出来た。ユキト君は見つけられた？」

「はい。僕はモゲラの群を見つけられたので、目標の数には到達出来ました」

ユキト君が持っている魔法苜を数えてみる。1、2、3………10！？一時間ちよつとで10匹もモゲラを倒したの！？ただけハイスペックなんだ、この子。

「それじゃあ遅くならない内に帰りましょうか？もう用はありませんよね？」

「あ、ああ」

そういえば俺は城への帰り道がわからない。くつ、恥じを忍んで道を聞くしかないか…

「あ、あのさ、ユキト君」

「何ですか？」

「俺はいきなりこの森に放り込まれたもんでね。その、城への帰り道がわからないんだ。良かったら教えてくれないかな？」

「あははは。お兄さんは無謀だけじゃなくて間抜けでもあるんですね」

くつ、その通りだがはつきり言われると傷つくぜ。

「いいですよ。僕の帰り道も城がある方角ですしね」

ユキト君に案内してもらってなんとか知っている道に来到ることが出来た。本当にユキト君にはいくら感謝をしても足りない。

「ユキト君。ここからなら城に帰ることが出来る。案内してくれて

ありがとう

「いいですよ。僕も楽しく過ごすことが出来ましたし」

「本当にありがとう。何かお礼をしたいんだけど何も持っていないんだ…」

「お礼なんかいいですよ。僕は道案内しただけですからね」

「そうかい？じゃあ今度会ったら絶対お礼をするから。さようなら
！！」

歩き出す俺の後ろからユキト君の声が聞こえる。

「さようなら。『勇者』のお仕事頑張ってくださいね」

あれ？俺、ユキト君に『勇者』だって言っただけ？

後ろを振り返るがユキト君はもういない。

うーむ、不思議な子だ。だがユキト君とはまた会えそうな気がする。

さっさと城に帰って魔法茸をファムさんに届けよう。

「強いんだか弱いんだかわからないお兄さんでしたね」

それにしても今回の任務は面白かった。魔法茸を採るだけの退屈な仕事だったのに、まさか『勇者』に会うことができるとは…

「うーん。お兄さんのスキルは再生のようですし、並みの人間には倒すことは難しそうですね」

まあ、僕ならば倒すことは出来ると思うが。命令されない限り積極的に彼と争うつもりはないけどね。それにしても彼は奇妙だ。さっきのモゲラとの戦いだって途中から別人のような強さになった。

それに怒り時のモゲラの突進を正面からくらって耐えきれぬ人間は聞いたことがない。再生のスキルだけでは説明が出来ない。それとも彼は超怪力だともいうのか？

「一応上司には報告しておきましょうかね」

しばらくは退屈しないですみそうですね。

8・迷いの森と少年

後編（後書き）

【城に帰った後】

俺が城に戻った時には既に18時を過ぎていた。

うん、俺にしては大分早く帰ってこれた。これならファムさんも合格をくれるだろう。

「ファムさん。魔法茸採ってきましたよ！これなら試験も合格ですよね！？」

ファムさんが笑顔になった。ふふふつ、こんなに早く帰って来れたことを褒めてくれるのかな？

「バカヤロウ！！魔法茸一本とるのに何時間かかっているんだ！？試験なんざ当然不合格だ！」

逆に怒られた。なんという理不尽。

「そりやないですよ、ファムさん。土地勘が無い上に方向音痴を自覚している俺にとつては迷いの森なんて場所から帰ってこれた時点で奇跡みたいなもんなんです！！第一、魔法茸がモゲラの角だなんて言うてくれなかったじゃないですか！！教えてもらうまで普通のキノコだと思ってたんですからね！」

「だから魔法茸の絵を書いた紙と一緒に置いていったらろうが！モゲラなんか迷いの森を歩けば絶対遭遇するんだから一目みればわかるだろ！」

「モゲラなんて全然いませんでしたよ！！森の奥に入ってようやく見つけられたんですから！」

「やかましい！！とりあえず試験は不合格だ！罰として明日から地獄の訓練メニューを3セットだ。覚悟しておけ」

そんな～！！地獄の訓練メニューを1セットやるだけでも余裕で吐くの。終わった…orz

「あ、それと魔法茸は姫様のところまで持っていけよ？元々姫様の魔法薬に必要なだから取りにいかせたんだからな」

【アリアの部屋にて】

「アリア。魔法茸を採ってきました。魔法薬に必要なんでしょう？」

「随分帰るのが遅かったのね？その魔法茸はいらないわ」

「いない？何故ですか？」

「貴方があまりにも遅いからメイドに言って市場から取り寄せたのだからその魔法茸は必要ないの。お分かり？」

「グッ、も、申し訳ありませんでした、アリア」

このクソ女～！！俺がどれだけ苦労して手に入れたと思っているんだ！？

「ソウヤの訓練はもう少し厳しくする必要があるのかしら？いくら

迷いの森とはいえモゲラー一匹にこんなに時間がかかるなんて……」

後日、アリアからファムさんに命令が来て訓練が厳しくなった。俺のアリアに対する殺意が膨れ上がったのはいうまでもない。

9・始まりの賢者（前書き）

なんとか1日で書き上げました。今回は説明なので少し読みにくいと思います。

これから書けしだい投稿します。

新しくお気に入り登録してくれた方、ありがとうございます

9・始まりの賢者

今日の俺はわずかな休憩時間の間に元の世界に帰る方法を探すことにした。

ちなみにアリアは今、帝王学の勉強をしている。その授業時間の間は休憩時間になるという訳だ。

「アリアのためにより多くの知識を学び王家のために役立てたい」と言ったらアリアが城にある文献を見る許可をくれた。

俺が元の世界に帰る方法を探していることがバレてないといいんだが…

そんな訳で俺は今資料室にいる。

クソッ！！召喚する方法は書かれているけど、送喚する方法は書かれていない。

だけど、タカヒロさんの日記には元の世界に帰る方法の手がかりを見つけたと書いてあった。タカヒロさんはどこで手がかりを見つけたんだ？この城で見つけたのではないのか？

「おや？ソウヤ殿ではないですか？こんな所で何をしておいでで？」

グレンさんだった。まずい！何とか誤魔化さなければ。

「あ、えーと、過去の『勇者』にはどんな人がいたのか気になった

んで調べていたんです」

なんとか誤魔化せたか？

「ほう。僭越ながら『勇者』については私の研究分野でしてな。よろしかったら、疑問にお答えいたしますぞ」

「あゝ、じゃあ、俺みたいに召喚された人って何年ぐらい前からいるんですか？」

いきなり言われてもこんな質問しか思い浮かばないよ。まあ、研究している人の話を聞けば少しは役に立つのかな？

「そうですね。ジェラル王国は建国して丁度1200年に成りますが、最初の『勇者』が確認されたのは建国歴812年と文献にはあります。だから、約400年前になりますな」

「元々ジェラル王国は小国だったそうです。400年前までは今の領土の20分の1もなかったみたいですな。しかし、他国に攻められて絶対絶命の時に当時の国王が初めて異界より『勇者』を召喚して戦争に勝利したことが始まりとされています」

400年前か。地球でいえば江戸時代の頃だな。

「400年前に初めて召喚したことは、それまでは召喚魔法がなかったたてことですよ？ 召喚魔法を開発したのは400年前の国王ってことですか？」

「ほっほっほ。ここからが面白いところでしてな。確かに文献には当時の国王が召喚魔法を作りだしたとありますが、とある学説では

これが出鱈目であるとしています」

「出鱈目？どういう意味ですか？」

「実は僕はその学説を支持してましてな。国王が召喚魔法を開発したとするならば説明出来ないことがあるのです」

「説明出来ないこと？」

「さよう。文献には各国で同時期に異世界人が召喚されたという記録があります。当時の国王が敵国に召喚魔法の術式を公開するなどありえませんか、各国で一斉に召喚魔法が開発されたとも考えられません。よって国王が召喚魔法を開発したという事実はないと僕は考えております」

なるほど、記録の改竄か。どこの世界でも偉い奴がやることは一緒
ってことが。

「じゃあ、グレンさんはどうやって召喚されたと思っているんですか？」

「僕は『勇者』について研究すると決めてから世界中を周り各地に残る『勇者』の記録について調べました。そこで興味深い事実が判明したのです」

「興味深い事実？」

「実は各国に召喚魔法を伝えたのはたった1人の若者の仕業だったのです。その若者により各国が召喚の方法を知り、『勇者』を皆が召喚することが出来るようになったのです。東方のバクフ皇国では『始まりの賢者』と呼ばれているみたいですよ」

始まりの賢者ね。誰だか知らないけど迷惑な技術を伝えてくれたもんだ。慰謝料を請求したいぐらいだね。

「その若者については不明なことが多いのですが、一説では自分は自らをこの世界に召喚したと言ったそうですよ」

自ら！？それってもしかして…

「グレンさん！！その人について詳しくお願いします！！」

「は、はあ。何でも『始まりの賢者』は自らをこの世界に召喚した後、文明の発展を促すためにあらゆる技術を各国に提供したそうです。時計を作る技術も始まりの賢者に提供されたと言われています」

時計も！？だから、時間の数え方も一緒なのか？

「その後も惜しみ無く技術は提供され、『始まりの賢者』は当時のバクフ皇国の姫と結婚したと伝えられていますね」

「そしてこれはあまり信用出来ない文献に書かれてあったことなのですが…、『始まりの賢者』が各国に召喚魔法の術式を伝えたのは自分と同類を作りたかったためとする説もあります」

「同類を？」

「さよう。何せ『始まりの賢者』は最初の異世界人。最初の内は良かったそうですが、しばらく経つと孤独に襲われたそうです。そして、自らを再び元の世界に召喚しようとしたところ召喚魔法が発動しなかったそうです。だから、各国に召喚魔法の術式を伝えて自分

と同郷の者を此方の世界に呼び寄せようとしたのが理由だとする説もあるのです。まあ、この説は圧倒的に少数派で僕も信じておりませんかな」

なるほど。だから、召喚魔法なんてもんが伝わったのか。自分が帰れないならこっちに呼び寄せればいいってか？

「我が国では当時の国王が召喚魔法を創造した事になっておりますから『始まりの賢者』についての資料はありませんが、バクフ皇国の皇族には『始まりの賢者』についての文献が代々受け継がれているそうです。いつかはその資料を閲覧したいものですな」

「グレンさん、色々教えて下さってありがとうございます。お陰で勉強になりました」

「ほっほっほ。この程度で良ければいくらでも。そろそろアリア様の授業が終わる頃でしょう。ソウヤ殿も戻られた方がよろしいですよ」

「はい。本当にありがとうございます」

グレンさんのお陰で大分わかった。バクフ皇国か…、俺が元の世界に帰るためには絶対に行かなければいけない場所だな。だけど、現状では行くことが出来ない。今はまだ早い。とりあえずは服従の呪文をどうにかしてからだな。でないと死んでしまう。

『始まりの賢者』がどうやって此方に自分を召喚したのかは知らないが、元の世界に帰るためのヒントぐらいにはなりそうだな。

タカヒロさんの手がかりっていうのはこのことだったのかな？

10・デート？

ソウヤが私の『勇者』になって1カ月が経った。最初は父に言われた通りにソウヤを道具のように扱おうと思ったが、私には無理だった。

それどころか、かなり打ち解けた気がする。きっかけはソウヤが私の地を見破ったことだと思う。

私は親しい者以外には基本的に第四王位継承者の仮面を被って応対する。

最初ソウヤにも主としての威厳を見せつける意味も含めて仮面を被って応対していた。ところがある日言われたのだ、

「アリア、ひよっとして猫被ってません？」

と。物心ついた頃から被っている仮面を出会って間もない人間に見破られて動揺してしまった。

だから取り繕う事も忘れて何故バレたのかと質問すると彼は苦笑いとともに答えてくれた。

「俺は地球で演劇をやっていたから演技している人間は何となくだけわかります。演技のために人間観察をしていたのでわりとすぐにアリアが演技していることはわかりましたよ」

最初はどうかと悩んだがバレているならばいっそそ地で行こうと思い、素顔の私で接することにした。だから、最初の頃に比べれ

ばかり仲良くなった気がする。私には同年代の友達がいないので友達が出来たみたいで嬉しかった。

だから、もっと仲良くなるために今日はソウヤを街に誘おうと思う。でも、城の皆は、特に父は私がソウヤと必要以上に仲良くすることを不快に思うだろう。だから護衛のためと称して街に連れだそうと思っているのだ。まあ、最近ソウヤも訓練を頑張っているようだしちょっとしたご褒美のつもりだ。

「というわけでソウヤ。街に行くから護衛としてついて来て」

「はあ。そういうわけかわかりませんが街に行くんですね？わかりました。準備をします」

ソウヤは準備をしに部屋に戻っていく。ソウヤも大分素直になったわね。父はソウヤのことを信用するなっているけど、私は結構信用してしまっている。王族として失格なのかしら？

「お待たせしました。ところで街に何をしに行くのでしょうか？」

そんなことを考えていたらソウヤが戻ってきた。兵士服で剣を肩に背負っている。

「ソウヤ、その格好じゃダメよ。庶民の服に着替えてきて。お忍びで街に行くつもりなの。私も庶民の服に着替えるつもりなのに兵士服で護衛なんかされたら一発で王族だとバレちゃうわ」

「お忍びで？そういうえば、グレンさんとかファムさんは知っていますか？あの2人がアリアが街に行くと知って放っておくとは思えないのですが」

「ええ、大丈夫よ。ちゃんと了承を取ってきたわ」

これは嘘だ。ソウヤを召喚するまでグレンは私の魔法の師匠兼世話役で、ファムは私の護衛隊長をやっていた。

小さい頃から城を抜け出す度に2人に怒られていた覚えがある。だからなのか、未だに街に行こうとすると何だかんだと文句を言ってきて行かせてくれない。ファムは自分の部隊の訓練中だし、グレンは私が騙して調べものをしてもらっている。黙って行くなら今しかないのだ。

2人で庶民的な服に着替えて街に繰り出した。ソウヤはこれだけは外せないと剣だけは持ってきてきているようだ。ちなみに城を抜け出した後の工作はタカヒロに命じておいた。彼は王族の命令を絶対に守るからうまく誤魔化してくれるだろう。

「それでアリア。何を買いにいくのですか？」

むっ、そう言えば考えていなかった。どうしようかしら？ご褒美だからソウヤの行きたいところに行くべきよね？

「私の用事はまだ時間の余裕があるから、ソウヤの行きたいところに行っていていいわよ」

ソウヤはかなり困っているみたい。やがてキヨロキヨロと辺りを見渡すと人だかりができている方を指差した。

「あゝ、じゃあ、あそこに行ってみていいですか？」

「わかったわ」

人ごみを掻き分けていくと大道芸をやっていた。魔法で日の輪を作
つてくぐり抜ける男、肉体の力のみで5メートルはある壁をかけ昇
る少年、小さな箱の中に入ってしまふ成人女性。その芸の見事さに
見とれてしまふ。ソウヤも大道芸に夢中のようにだ。

「ねえ、ソウヤ。貴方の世界にもああいうのあったの？」

「ありますよ。さすがに魔法はありませんがね」

そういうとソウヤは遠い目をした。そこで私は気付く。

ああ、私は何故故郷を思い出させる話をしてしまったのだろうか？彼
から故郷を奪ったのは私ではないか。その私がこのような話をする
なんて……罪悪感でおし潰されそうだ。

だから、私はことさらに明るく振る舞うことにした。

「もう芸も終わったみたいだしここはもういいわよね。そう言えば
向こうに美味しそうなお菓子があつたわ。あれを食べにいきましょ
う」

「はい。かしこまりました」

了解の返事をしたソウヤの腕を無理矢理掴んで引つ張っていく。

「あ、アリア！？そ、その腕を掴むのはちょっと…」

ふふふ。慌ててる慌ててる。顔を真っ赤にしているソウヤを見てい

るのは楽しい。実にからかいがいがある。

「あら、いいでしょ？今日の私は庶民なの。庶民の男女は腕を組んで歩くものなのでしょう？」

「いや、そういうのは付き合っている者同士がすることですてね…」

「もう、うるさいわね。じゃあ、今日の私とソウヤは付き合っているという設定ね。これは命令よ」

「は、はあ」

ソウヤは諦めの溜め息をついている。ファミや侍女達から庶民の男女の付き合い方を聞いて、一度は男の人と腕を組ながら街を歩くということをやってみたかったのだ。

それに実はソウヤをからかっている私も内心はドキドキしている。男の人と腕を組むなんて初めての経験だ。いずれ私は四貴族の誰か他国の王族の嫁に行くことになる。結婚前に腕を組むぐらいはいいでしょう？

店の前に着きお菓子を2人分買って食べて見る。

おいしい！！一口食べてそう思った。城で食べるデザートなんかよりよっぽど美味しい。「父は王家たる者、庶民が食べるものを食べてはいけない」というけど、そんな教えはさっぱり忘れてしまうほど美味しかった。

その後もソウヤを連れ回して色々な店の食べ物を買って食べた。時

刻を見ればもう夕方。そろそろ城に帰らなければいけない。

「アリア、もう夕方です。そろそろ城に帰りましょう」

「ええ。わかっているわ」

今日は本当に楽しかった。初めて食べたものや見たことのないもので街は一杯だった。まるで宝石箱みたい。今日はソウヤのご褒美のつもりだったけど、私にとってのご褒美にもなってしまった。

「そういえばアリアの用事は何だったのですか？今日は店を回ることしかしてなかったみたいですが」

しまった。そういえばそんな理由で街に繰り出したんだ。今から何か理由をでっち上げなければ。

「あゝ、えーと、そうそう。街をこうして見回ることが今日の目的だったのよ。彼らは私の国民だから、こうして庶民の生活を視察するのも王族の仕事の一つなのよ」

「はあゝ、そうなんですか」

ソウヤは感心したような目で私を見ている。うまく誤魔化せたみたいね。

城への帰り道、人だかりが出来ているのを見つけた。また大道芸かしら？気になって視線を向けるとフードを被った旅人と男が言い争っているようだ。

「おいおい、てめえがぶつかったせいで腕が骨折しちゃったじゃね

えか。どうしてくれるんだ？」

「そんなわけがないでしょう！？ぶつかったぐらいで骨が折れる人間なんて聞いたこともないわー！」

「実際に折れちまつたんだからしょうがねえだろうがー！それとも何か？俺が嘘をついているっていうのか？ああん！？」

「私にどうしろっていうのよ！？」

「だから治療費払えっていつてんだろうがー！特別に有り金全部で許してやるっていつてんだよ！」

：あれは何なのかしら？大道芸の一種なのかしら？私は気になったのでソウヤに聞いてみることにした。

「ねえ、ソウヤ。あれは何？大道芸の一種なの？」

「いや、あれはなんというか、あの旅人にチンピラがイチャモンをつけているんですよ。完全に金目的ですね」

なるほど。あれが噂に聞くイチャモンというやつか。初めて見た。しかし、そうであるならば放って置けない。

ファミからはああいうのは見つけたら速効でぶっ倒したほうが世の中のためになると教わっていることだし。

私は人混みを掻き分けて騒ぎの中心に入っていく。後ろからソウヤの静止の声が聞こえるが、それはきつと幻聴だろう。

「やめなさい、そのチンピラ。そのようなイチャモンをつけて恥ずかしくないのですか？」

旅人も男も野次馬も全員が呆氣にとられたように私の方を見ている。やがて男が正気をとり戻して私を怒鳴りつけた。

「ああん！？何だてめえは！？」

そのような乱暴な喋り方をされたのは生まれて初めてだ。少しだけ感動を覚えてしまう。しかし、何者…か。さすがに王族を名乗る訳にはいかないわよね。

「私は通りすがりの正義の味方よ！」

「ふざけてんのか！てめえは！！」

何か間違ったかしら？こいいう時ってこう名乗るものじゃないの？ファミに教わっていたのと違うわね…

「お？よく見れば可愛い顔をしてるじゃねえか。そのフード野郎の変わりに姉ちゃんが払ってくれるのか？姉ちゃんなら金じゃなくて別のものでもいいんだぜ？」

…別のものって何なのかしら？私が悩んでいるとチンピラは私の肩を抱こうとしてきた。

まあ！なんていう無礼者。名乗っていないとはいえ王族たる私に触ろうとするとは。これは魔法で攻撃してもいいわよね？

私が呪文を唱えようとしたその時、

「憲兵さん、こっちです！こっちでチンピラにからまれている人がいます！！」

という声が聞こえた。

マズイ！！憲兵が来たら私の正体がバレてしまう。チンピラはその声を聞いた瞬間、一目散に逃げ出した。私も早く逃げなければ…私が動揺していると手を引かれた。顔を向けるとソウヤが私の腕と旅人の腕を引っ張っている。

「憲兵がくる前に逃げますよ！」

3人で走ってなんとか落ち着ける場所までこれた。

「ねえ、ソウヤ。憲兵を呼んだのは貴方？」

「ええ、そうですよ。アリアが俺から離れてすぐに呼びにいったんです」

「まったく、なんてことをしてくれたの！？もう少しでお仕置きが出来たのに！」

私が文句を言っているとソウヤは呆れている。何よ？私は間違ったことはしていないつもりよ。私が更に文句を言おうと口を開いた時、声が聞こえた。

「あのー、助けていただいてありがとうございます。おかげで助かりました」

そう言えば旅人の存在を忘れていた。

「別にいいですよ。人として当たり前のことなのですから」

「それでも助けていただいたのは事実です。改めてお礼を言わせて下さい。お二人共本当にありがとうございます」

随分礼儀正しい人のようだ。私はこういう人には好感が持てる。声を聞く限り女性みたいね。それにしてもフードは取らないのかしら？ソウヤも疑問に思ったみたいで旅人に聞いている。

「フードは取らないのですか？」

「すみません。とある事情がございましてフードをとる訳にはいかないんです。助けていただいた身でありながら顔を見せることも出来ないなんて申し訳ないです」

フードをとる訳にはいかない？世の中には変わった人もいるものね。ファッションっていうやつかしら？

「あのー、失礼でなければお礼を差し上げたいのですが……」

そう言つて旅人は私達に数枚の銀貨を差し出してきた。こういう時つてどうすればいいのかしら？お金なんか腐るほどあるし別にいらないのだけど……

「困った時はお互い様ですから、さっきアリアが言つたようにお礼は結構ですよ」

ソウヤは私の意を読み取ってくれたようだ。

「ですが、それでは私の気がすみません!!」

中々しつこいわね。どうしようかしら?.....そうだ!

「そんなにお礼がしたいならば貴女に引き取ってもらいたいものがあるの」

「引き取ってもらいたいもの、ですか?」

「ええ。実は私達、お店で色々なお菓子を買いすぎて処分に困っていたの。だから貴女が引き取ってもらえないかしら?」

「そんな! 助けていただいた上にお菓子を貰う訳には...」

「ああ、もううるさいわね。ソウヤ、彼女にお菓子を渡しなさい」

「アリアは言い出したら中々言うことを聞きませんから。素直に貰っておいた方がいいと思いますよ」

ソウヤが苦笑いと共に旅人にお菓子を渡している。失礼な! まるで私が頑固者みたいではないか。

「あの.....、なんといいたらいいか本当にありがとうございます!」

旅人は感極まっているようだ。その内泣き出しそうな様子だ。

「別にいいわよ。さて、そろそろ帰るわよ。貴女も早く宿を探した方がいいわよ」

そう言つて私はソウヤを連れて歩きだす。すると後ろから声が聞こえた。

「お二人とも本当にありがとうございます。アリアさんとソウヤさんですね。このご恩は決して忘れませんから!!」

ふふふ。今日はとっても楽しい日だったわ。ソウヤとも仲良くなれたし、人助けも出来たことだし初体験の連続だ。もう時間も無いけど、今日はいいことありそうね。

城に帰ったらファムとグレンが仁王立ちで待っていた。

「何を考えているのですか!? 城を抜け出すなど!!」

「ソウヤ、何で姫様にお前がついているんだ? 勝手に抜け出すとはいいい度胸だな?」

「えっ? だつてアリアは許可を貰つたつて…」

「ああん? 許可なんかした覚えはないがな。そうかそうか、城を抜け出すぐらい元気が有り余っているのか。だつたら今から俺と訓練しような」

「そ、そんな」

ソウヤはファムに連れていかれてしまった。ちょっとさすがったかしら？ソウヤに悪いことをしたわね…

「聞いているのですか！？だいたい姫様には王族としての自覚が足りない。いいですか？そもそも王族というものは……………」

はあ。私はいつ解放されるのかしら？

「はあ、ひどい目にあった」

ファムさんとの訓練という名前の地獄が終わってようやく部屋に戻ってくる事が出来た。

それにしても今日は楽しかった。今まで行くことが出来なかった城下町に行くことが出来て本当に嬉しかった。

アリアに対する感情はこの1カ月で大分変化した。あいつはいつも俺を振り回す。まるで生意気だけど素直な妹が出来たみたいだ。

はつきり言って俺はアリアにかなり情が移っている。あんなに綺麗

な女の子と四六時中一緒にいたら情が移って当然だろう。それに今日はかなりドキドキした。彼女いない歴〃年齢の俺にとっては綺麗な女の子と腕を組むだけで心臓が破裂しそうだった。

ただこれ以上情を移したらいけない。俺は絶対に元の世界に戻るつもりだし、絶対に王族の奴らを殺すつもりだ。

だが、ふとした瞬間に自問自答をする。「お前はアリアを殺せるか？」と。

今日も答えがでない問いに悩むことになりそうだ…

11・武器を求めて

「クククツ、近い内に大きな戦争が起きるよ。どうするつもりなんだい？国王様？」

戦争？そのような情報は入っていないが…

「相手はどこだ？」

「なんとビックリ！4年前に和平条約を結んだダント王国だ。条約なんて本当に口約束程度のものだよね。クククツ」

ダント王国だと？あそこが裏切るとは思えないがな。だが、この女に言われたら信じるしかない。この女が予言したことは必ず起こるのだから。

「ダント王国が召喚した『勇者』はかなり強力なスキルに目覚めたみたいだね。4年前の戦争の傷痕も大分癒されたから上層部が調子に乗っちゃったみたいだよ。クククツ」

「…相変わらずお前は全てを見透しているのだな。我はお前が不気味で忌々しくて心の底から気に入らない」

「おやおやおや、それは気が合うね。ボクも君のことが大嫌いだよ」

出来ることならば今すぐ殺したい。だが、こいつは他の道具どもとは違うのだ。こいつがいなければ私の願いは叶えることが出来ない。

「傍観者よ。伝えたいことはそれだけか？」

「いや、後1つだけあるよ。ソウヤ君を戦争に使った方がいいよ。彼は強力な『勇者』だから」

ソウヤ？アリアが召喚した道具が確かそんな名前であつたな。

「当たり前だ。あの道具どもはこういう時のために用意したのだ。それを使わない手は無いだろう」

あの化物どもを王家のために使つてやるのだ。感謝されても良いくらいだろう。

「姫様以外の君の子供達とその『勇者』は留学中だろう？タカヒロ君とソウヤ君だけで戦うつもりかい？」

「お前は戦わないのか？」

「おやおやおや？ボクを戦力に数えているのかい？ボクと契約した時に言つたはずだよ？ボクは傍観者だと」

ふん、傍観者は動かずか。だが、所詮はダント王国。4年前の戦争で向こうの過去の『勇者』は殺したし、今回は新たに召喚された1人だけだ。あいつらだけでも勝てるだろう。

「わかった。戦争の準備を整えて置くでしょう」

そういえばこいつは何故ソウヤとかいう道具を気にかけるのだ？今までの道具にここまで興味を示したことはなかったはずだが…

「傍観者よ。アリアが召喚した道具は何だというのだ？何故お前が

興味を持つのだ？お前に言われた通り、魔法をかけては置いたが」

「クククッ。ボクは聞かれたことに全て答える訳ではないのさ。ただ、あえていうなら彼は特別さ。ボクとは比べられないぐらいにね」
本当に忌々しい。だが我は願いをかなえるためなら全てを利用する。この女だろうと、たとえ実の子供であろうとも。

「君は願いのために本当に姫様達を利用することになるんだろうね」。実に滑稽だよ。クククッ」

「心を読むな。忌々しい化物め！」

「心を読んだんじゃない。知っているのさ。君のご存知の通りにね」

我は傍観者を睨み付け無言で部屋を後にした。

- - - - -

「ソウヤ。今日は貴方の武器を探してらっしゃい！」

…何を言っているのだろう、このお姫様は。武器なら既にあるではないか。

「武器、ですか？普段から使っている剣があるのですが…」

「それは一般兵士用の剣でしょう？私が言っているのは貴方専用の

武器のことよ。お金は出してあげるから好きなのを買ってください」

「それは嬉しいのですが、何故こんなに急に？」

「お父様がそろそろソウヤ専用の武器を用意してもいい頃だろうって。ソウヤの頑張りがお父様に認められたんじゃない？」

あのオッサンが？まともに顔を合わせた回数は少ないが、どう見ても俺に好意的とは思えなかったのだが……

「わかりました。それでどこで剣を買えばいいのでしょうか？」

「さあ？私は剣を買ったことなんてないもの。ファムに聞いた方がいいんじゃない？今は訓練場にいるはずだから」

……今日もお姫様は絶好調らしい。この1カ月でわかった、アリアは天然だ。

俺は訓練場に行ってファムさんに相談することにした。

「ファムさん。アリアに武器買って来いって言われたんですけど、どこかお薦めの店はありますか？」

「あーん？剣だと？姫様にいわれたのか？」

「はい。なんでもアリアが国王様に俺の武器を買ってもいいみたいなことを言われたみたいです」

「国王様がねー。他の『勇者』に比べたら専用の武器を与える時期が早い気がするがね」

どうやら俺は他の『勇者』達より優遇されているみたいだ。俺はあのオッサンに気に入られたのかな？心当たりはないんだけどな…

「まあ、姫様の命令なら仕方がねえ。お前は姫様の『勇者』だからな、姫様のためにも、そしてお前のためにもそんじゃそこの店は紹介できねえな」

ファムさんは俺のために真剣に悩んでくれている。その態度が嬉しかった。だから自然とお礼の言葉が出た。

「俺のために真剣になってくれてありがとうございます!!」

「ばっか、照れるじゃねえか!!お礼なんていうもんじゃねえよ!!」

ファムさんは真っ赤になっている。どうやら照れ屋のようだ。

「お前は長剣を使うからな、よし!長剣を買っならあそこしかねえな。ソウヤ、とっておきの店を紹介してやる」

「ただその店は頑固なジジイが店主をやっているな、ジジイに気に入られた者しか商品売ってもらえないんだ。その分、売っているものはどれも超一流の品なんだけどな」

気に入られた者しか売ってもらえないって…、昔懐かしい頑固親父の店ってやつか?

「どうすれば気に入られるんですか?」

「それが基準が全くわからねんだよ。実は俺もその店の武器を使っているんだけどな、俺は3カ月間毎日通ってようやく売ってもらえた。だけど、俺の知り合いには初めて行ってすぐに売ってもらったやつもいる。本当にジジイ次第なんだよ」

おいおい。基準がわからないってことはひょっとしたら売ってもらえないってこともありえるのか？

「まあ一応、紹介状書いといてやるから。ダメ元で行ってこい。ダメだったら他の店を紹介してやるよ」

「わかりました。ありがとうございます」

ファミさんに場所を教えてもらって、すれ違う人に道を聞きつつなんとか目的の店にたどり着いた。

店は山奥にあって、訪れるのにも大変な労力がある。これを3カ月続けたファミさんは化け物だと思う。

店に入るが商品も店員さんも見当たらない。店というよりは個人の家って感じた。まさか、場所を間違えた？

「あのー、すみません。誰かいませんか？武器を買いに来たのですが…」

「誰じゃ？お前さんは」

後ろから声が聞こえて振り返ると、そこにはジイサンがいた。

白い髪に長い髭、右目に眼帯を付けている。厳しそうな顔つきをしており、もし地球にいたなら老人ホームに入るぐらいなら死ぬというタイプだろう。

「あの、ここの店主さんですか？」

「そうじゃ。それでお前は誰じゃ？」

「あの、俺はファムさんにこの店を紹介されて武器を買いに来ました。えっと、これはファムさんの紹介状です」

俺が紹介状を渡すとジイサンは読み始めた。

「ファムルスの小僧の紹介か。ならば、俺が気に入った人間にしか武器を売らないことは知っているな？」

「はい。だけど、俺はどうしても武器が欲しいんです。だから俺に武器を売って下さい！！」

「…お主は何故武器を欲しがるのがじゃ？理由によっては売ってやる」

理由？…元の世界に帰るために決まっているじゃないか。俺はいずれ絶対に誰かと戦うことになる。だったら、武器も一流の物の方がいい。

このジイサンには自分が『勇者』だと話すべきか？こんな山奥にいるんだ。言っても特に問題はないだろう。

「実は俺、異世界から召喚された『勇者』なんです。だから少しでも強くなるために貴方の店の武器が欲しいんです」

俺が勇者だと言うとジイサンは目を見開いた。体も小刻みに震えている。

お？これは手応えがあるんじゃないか？もしかしたら売ってもらえるかも…

「な〜に〜！？勇者じゃと〜！？僕はこの世で勇者が一番嫌いなんじゃない！！出ていけ！！二度と顔を見せるな！！！」

ジイサンは俺を店からつまみ出し、扉を閉めて鍵をかけてしまう。

「ちょっと待って下さい！！なんで急に態度を変えたんですか！？もう一度顔を見てお話ししよう！」

「うるさい！！それ以上店の前にいると斬り殺すぞ！！」

おいおい、なんなんだよこのジイサンは〜！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8948r/>

異世界に召喚されて

2011年5月6日05時33分発行